

元禄地獄小町

嗜虐の宴

徳川幕府による長く続いた平和と安定により、商活動は一機に活発になり、商人の財力は驚くほど豊となり、今や武士をしのぐ程の勢いとなっていた。

経済力という実力を身に着けた商人達は競って豪華な家を建て、贅を尽くした着物を身に纏い、その豊かさを互いに誇示しあっていた。

後世に云う所の元禄文化真っ盛りであった。

「お銀！お前が手代の小吉とグルになって店の金を盗み出したのは、分かっているんだ！盗んだ金を何処に隠した！」

禪一枚の裸の上に印半纏を纏った男が、手にしたささらになった竹竿でお銀の背中を烈しく叩いた。

ガシャッという鈍い音を立てて、細かくささらに切られた竹の鞭がびっしょり油汗に塗れたお銀の背中で撥ね、飛沫を上げて汗を弾き飛ばした。

「ああ・・・！ あれは小吉さんが一人でやったことで、私は何も知らないんです。信じて下さい！」

女が悲鳴をあげ、苦痛に顔を歪め、涙を流しながら、必死に哀願した。

薄暗い土蔵の中で、大勢の男達に取り囲まれ、一人の女が素っ裸にされて、麻縄で両手を後手に高手小手に縛り上げられていた。

腕を縛り上げて余った縄は、あばら骨の浮き上がった薄い胸の上下に這わされて、貧相な両乳房を上下から精一杯括り出すように縛り上げていた。

そして、先端を鋭く尖らされた三角木馬の上に両脚を割って載せられていたため、女の体重を受けて鋭い木馬の稜線は女の秘裂の奥にまで深々と食い込んでいた。

お銀は既に半時近く男達から烈しい拷問を受け続けており、全身はビッショリ汗にまみれ、青竹で叩かれた痕が赤く腫れ上がり、意識も朦朧としていた。

「白々しい嘘を言うな！お前が以前から小吉と連^{つら}んでいたことは、調べが付いているんだ！逃げた小吉は何処に行った？！盗んだ金は何処に隠した？！」

男が割れ竹で今度は縄に^{くび}縊り上げられた乳房を思い切り叩いたので、激痛の余り激しく身

悶え、腰を揺すった途端、股間に食い込む木馬の尖った稜線が女のもう一つの急所を下から攻め上げ、敏感な乳房を叩きのめされる激痛と秘所を責め立てる激痛の上下から苛む苦痛に狂ったように泣きわめいた。

木馬を挟んで向かい合う別の男が、互いに目配せをして示し合うと、お銀の背中と腰に両手を掛け、木馬の稜線に沿って前後に思い切り腰を揺すった。

木馬の背に陰部を搔き舐られ、股間から脳天を直撃するような激しい痛みが駆け抜け、木馬の上でお銀が体を硬直させた。

更に男が、鬻^{かき}に掛かったように、木馬からだらりと垂れたお銀の足首を掴んで自分の体重を載せて下に引っ張り、お銀の腰を強く木馬の鋭く尖った背に押し付けたので、お銀は、空気の抜けるような声を上げると、そのままガクッと体を前のめりに倒した。

天井の梁から吊された縄により上半身を吊されているため、木馬から転げ落ちることは無かったが、木馬の上で完全に意識を失っているようであった。

深々と木馬の尖った背を食い込ませた股間から黄色い液が溢れ出てきて、ボタボタと滴り落ちて来て木馬の下を濡らした。

「俺たちの尋問を無視して、お馬の背に跨ったまま居眠りしようとは、フテュー女だ！」

別の男が桶に水を汲むと、意識の無いお銀の体に浴びせかけた。

冷水を浴びせられ、意識を取り戻したお銀にむかって、再び男達は容赦なく暴行を加えるのであった。

残酷な男達の何時果てるとも知れない烈しい拷問の苦痛に、正常心を完全に喪失したお銀は、泣き叫び、身を振って、叫き散らすような声で許しを請うた。

しかし、お銀を責める男達に取って、悲痛な女の哀願の泣き声は、逆に残虐な心に新たな嗜虐の火を点けるのか、更に責め手を強くするのであった。

何時果てるとも知れない激しい拷問を受けるながら、突然、女は譫言のような訳の分からない言葉を口走ると、白目をむいて、口から泡を吹き出して、木馬の上で再び意識を失った。

長時間に渡る激しい責めで、体液という体液が、流れ出る汗と度重なる失禁で流出して、すっかり脱水症状に陥り、体力を消耗し切った疲弊した土気色の顔の落ち窪んだ眼窩からまるで幽鬼のような気配を漂わせる、痩せ細った青白い女の体が在った。

木馬の上に跨ったまま死んだように動かなくなってしまったお銀を取り囲んだ男達が、

「とうとう逝ってしまいやがったぜ・・・今日はこれぐらいにしておくか・・・」と、激し

かった責めに疲れを感じて、額に浮かんだ玉の様な汗を手で拭いながら言った。

お銀を責めていた男達が車座になり、ワイワイと楽しそうに声を上げ、目の前に並べられた膳をつつきながら酒を酌み交わしていた。

「ご苦労だったな、まあ、一杯やりねー」

先ほどまで、盛んに青竹を振り上げていた油問屋の主人の沼田屋相兵衛が熱爛の徳利を摘むと、ニコニコと笑みを浮かべるお銀の捧げ持つお猪口に酒を注いだ。

「へえ、今日の責めは一段と厳しゅうござんしたよ、あたしゃ本当に木馬の上で責め殺されてしまうんじゃないかと思いましたよ・・・」

お銀は相兵衛から注がれた酒を旨そうに飲み干して、相兵衛のお猪口に返杯しながら言った。

「今でも股の間がジーンと痺れて、こりゃ、当分の間、痛くて尿^{いばり}をするのも大変ですよ・・・」男達から加えられた責めの痛みで正座も出来ず、両脚を前に突き出すというだらしないうり方のまま投げ出した両脚を大開にすると、自分の手で着物の前を捲り上げ、赤く腫れ上がった醜く変形した股間を車座になった男達に見せたので、男達は醜く腫れあがった陰部の襞や血を滲ませる秘園を目にしてドッと大声を上げて笑い合った。

「こいつは、随分と腫れ上がったものじゃないか？」

隣に座った男が熱を帯びて何倍にも膨れ上がった陰唇に指を伸ばしながら呟いた。

ズキズキと痛む敏感な部分に指を立てられ、激痛に悲鳴を上げながらお銀が脚をバタバタさせた。

男の手を振り払って股座への悪戯を止めさせる訳でもなく、子供が拗ねる様に脚をバタつかせるお銀の様子に男達から笑い声が上がった。

実は男達は、羽振りの良い商店の旦那衆であり、全員加虐趣味を持つ男達であった。

日頃はこの陰虐な性癖を隠して家業に勤しんでいるが、ひた隠しにしていると同じ性癖を持つ者同士は互いに分かるのか、何時しか同好の者同士で集い合うようになっていたのだった。

そして、とうとう自分たちの趣味が昂じて、互いに金を出し合いお銀を囲って、定期的に加虐の会を持っていたのだった。

お銀は昔夜鷹をしていたが、ある時相兵衛の雇った裏家業の者に誘拐されて、この加虐の会の隠れ場所に連れ込まれて、それ以来ここに幽閉されていたのであった。

今回は店の金を持ち逃げした女中の役で被虐の役回りを演じたが、男と不貞を働いた武士の妻の役とか、番所で取り調べを受ける女泥棒の役とか、毎回色々な設定で男達の責めを受けるのであった。

毎回の役回りは架空のものであっても、男達の責めは演技では無く真剣なものであり、毎回残虐な男達に死ぬほどの責め苦を味合わされていたが、それでも雨露を凌ぐ屋根があって、温かい布団に眠れて、三度の温かい食事が与えられる方が、常に飢えの恐怖に苛まれ、寒い冬の夜でも雨の中でも安眠するねぐらも無く、自分の身体を肉欲に飢えた男達に切り売りするしか生きる道が無い、明日をも知れぬ夜鷹生活をしているより楽なのか、ここから逃げ出す素振りも見せず、男達の変態趣味に付き合っていたのだった。

「こんな夜鷹上りの^{とう}臺の立った阿婆擦れ女じゃなくて、可憐な小町娘を一度は責めて見たいもんだな・・・」

と、すっかり酔いの回った旦那の一人が声を上げた。

これを聞きつけて、「臺の立った阿婆擦れ女で悪うござんしたね！こう見えても私やね、夜鷹仲間の内では一番若くて美人で通っていたんですよ！」と、口を尖らせた。

まあまあと言うようにニコニコと笑いながら相兵衛が間に入った。

「そう言う話が出ると思って、ちゃんと次の手筈は打ってあるぜ。」

と、周囲を見回しながら穏やかに言った。

嗜虐趣味を持った旦那衆の中でも沼田屋相兵衛の性癖が一番残酷性を持っており、この会のなかでも指導者的な立場にある相兵衛の言葉に、周囲を囲んだ旦那衆が次に相兵衛が何を言い出すのかと顔を見合わせた。

「おい！^へ入って来な！」

相兵衛が奥に向かって声を掛けた。

へい、と奥から返事があり、若い男が車座になった男達の前に姿を現した。

その若者の姿を目にした瞬間、一同ドキリとした驚きに包まれ、シーンと静まりかえった。

水も滴る様な一と言う表現はありきたりでは在るが、女のように色が白くスラリとした華奢な手足を持ち、スッキリと通った鼻筋は、人気の歌舞伎役者を思わせる若者であった。

その美形を目にして、居並ぶ男達は息をするのも忘れ、流石のお銀も思わず頬を赤らめて、だらしなく座っていたのが居ずまいを正し、乱れた髪を梳った。

「どうだ、いい男だろう？」

美形の若者の出現に唾然とする一同を楽しそうに見回しながら相兵衛が得意そうに言った。

「こいつの名は、通称、お役者半次。裏の世界では拐^{かどわ}かし屋^{しや}の半次って云う名前通っているヤツだ。見ての通り役者のような綺麗な顔をしてやがるが、こいつほど悪いヤツは、そうそう世の中にいるもんじゃ無い・・・」

悪人と聞いて、取り囲む旦那衆が、目の前の床に片膝立てて腰を降ろす、男の何一つ問題の無い、調った美しい顔をしげしげと見つめた。

半次と呼ばれた男は悪びれた様子も見せず、俯いたまま口元にニヤッと小さな笑みを浮かべて黙って肯いた。

「こいつにかかったら、可憐な小町娘だろうが、貞淑な武家の奥方だろうが、もうお終いさ・・・」

相兵衛が周囲の男達をグルッと見回しながら語り始めた。

「先ず、こいつは、女みたいな綺麗な顔で狙った女に近づく。女達も自分が獲物にされているとも気づかず、いい男から接近され警戒を解いてしまう・・・次に、得意の話術で女をドンドンと、たらし込んでしまう・・・そして懇^{もんこう}ろになったところで、実は自分にはヤクザに莫大な借金があって、それを返さないと殺されてしまうとか何とか女に打ち明ける・・・情^{ほだ}に絆された女は、自分から苦界に身を売って、金を作って此奴を助けようと言いついていう算段さ。・・・年期が明ければ所帯を持とうと言う男の言葉を信じてな・・・ところが、それは全部真っ赤な嘘という訳だ。郭^{くるわ}に入ってから、あっちにもこっちに同じように半次から約束された女がいることを知り、自分こそは半次から真に愛されていたと思い込もうとするが、その後からも次々と半次に騙された女が入って来て、初めて自分が騙されていたことが分かるのさ！しかし、もうその時には出るに出られない駕籠の鳥と言う訳さ・・・狙った女を拐かして、女を郭に売って金を稼ぐ。だから拐かし屋の半次さ・・・」

「へい、その通りでござんす。」

今まで下を向いて相兵衛が皆に説明するのを無言で聞いていた半次が初めて口を開いた。

その透き通った優しい声音にも街のゴロツキの様な悪人の片鱗は感じられなかったので、男達もその意外さに驚いた。

「自分の遊ぶ金稼ぎに女を拐かすこともあれば、今回の旦那の依頼のように、街で評判の美人がいたら名指しで、拐かしてくるよう郭の主人から金を積まれることもありやす・・・」

「で・・・首尾はどうなんだ？」

相兵衛が冷たい目で半次を見つめながら聞いた。

「へえ、あっしの手管で落ちないような女は居やせん。何時でもあの娘を旦那達の前に連れて来ることが出来ますぜ・・・」

と、半次が自信を持って嘯いた。

半次のきっぱりとした言葉に相兵衛の口元が淫靡に歪んだ。

「特にあの娘は生まれつき甘やかされ放題で育った我が儘娘。それが親の言い付けで風采の上がらない番頭と結婚するように言われて、反発しておりました。そこに出来た心の隙に旨く入り込み、易々とたらし込むことが出来ましたよ・・・」

「大黒屋ももうお終いだな・・・」

相兵衛がぼつりと言った。

大黒屋と聞いて周囲の男達が驚いて顔を見交わした。

大黒屋は沼田屋と並ぶ、この街の二大油問屋で、二人の娘と一人息子が居たはずだ。

娘は二人とも美人で評判であった。

「大黒屋のケチの付き始めは、去年の夏にしっかり者の息子が流行り病で、ぽっくり逝ってしまってからだ。同じくしっかり者の姉は既に海産物の問屋に嫁に出しており、後に残ったのは、小さい時から甘やかされて育った末娘だけだ。・・・両親は信頼している番頭に娘を妻合わせ婿養子に迎えて家を存続させよう考えたが、親の心子知らずで、やんちゃ娘が聞く耳を持たない・・・」

大黒屋の末娘のお美代のことは、ここに居るほとんどの男達は、街で見かけた事があり、良く知っていた。

世間の評判以上の美しい顔を持ち、柔らかな下ぶくれの丸みを帯びた、そして少しツンとすました少女のような幼さを残す顔は、痩せぎすではお骨の突き出たお銀の狐のような顔とは、まるで月とスッポンの違いであると思った。

真に油で磨いたようなすべすべとしたきめ細かな白い肌は、ここに座るお銀のあさ黒い荒れた肌とは比較にならず、若い健康的な張りのある体付きは、お銀の瘠せた病的な体とは大違いであった。

男達は、その評判以上の美しさを持つ若い娘を自分たちの思い通りにいたぶる様子を目に浮かべた。

しかし、大事な跡取り息子を亡くしたばかりで、今また溺愛してきた末娘を失えば、大黒

屋の衝撃はどれほどであろうか。

大黒屋の主人は二度と立ち上がれないほど心に痛手を受けるのでは無いか？、

この町の二大油問屋と言っても、過半は大黒屋が占め、長い間、沼田屋は二番手に甘んじているが、大黒屋も娘が居なくなったら商売どころでは無くなってしまいうだろう？

これは沼田屋相兵衛の色と欲を掛けた計略ではないかと男達は思った。

夜鷹が一人居なくなっただけくらいでは、世間は誰も気にしないだろうが、大店の娘がいなくなれば世間では大騒ぎになるだろう。これは非常に大きな犯罪ではないか、と男達は思いを巡らせた。

これまで良い気分で飲んでいた酒の酔いが、潮が引く様に醒めていくのを感じていた。

「どうしたい？話を聞いてびびったのかい？厭なら抜けても良いんだぜ・・・」

真剣な顔つきで悩む男達に気付いて相兵衛が横目で睨みながら冷たく声を掛けた。

重大な犯罪に荷担することに思い悩む旦那衆を勇気付けるように、

「大丈夫でやすよ、あっしが尻尾を掴ませるようなドジは踏みませんよ。」

と、半次が自信を持って言った。

「厭なら俺一人で、お美代の若い綺麗な体を責め懲るぜ・・・」

ニヤッと片頬を歪めながら相兵衛が続けた。

盛りを過ぎた夜鷹を責めて得られた快感より、数段大きな快感をもたらすであろう、若い小町娘を責めることの欲望を振り切れず、男達は「よし、やろう！」と声を出した。

誘拐

「お美代さん、こちらでやすよ・・・」

月が漸く足元を照らすだけの暗闇の中、半次がお美代の手を引いて、幾つもの通りを駆け抜けると、小路の奥の塀を引き回したこぢんまりとした家の中に導いた。

相兵衛達の密会があった数日後の深夜に、すっかり手筈を整えた半次が、最後の仕上げとして大黒屋からお美代を連れ出してこの小宅に連れ込んだのだった。

「嬉しい！ここで半次さんと所帯を持てるのね！」

世間知らずのお美代が半次の腕に縋り付きながら、これから半次と始める甘い生活を夢見てウットリとした声を上げた。

誰にも気付かれぬよう密かに寝静まった家を抜け出し、僅かばかりの提灯の灯を頼りに、半次に手を引かれながら暗い道を逃げるようにここまで来たのだった。

月明かりの闇夜の中に現れた板塀に囲まれた小宅は、自分の住み慣れた屋敷と比べれば粗末な家で在ることは夜目にも分かったが、若いお美代には半次とのこれからの生活を想像すると気にはならなかった。

がらんとした何も無い畳敷きの部屋に通されると、

「お嬢さん、これから所帯道具を持って来ますから暫くここで待っていて下さい。」

と言って半次がお美代を残して部屋から出て行こうとした。

暗い部屋の中に一人取り残されると知って、不安になって「待って、半次さん。お美代を一人にしないで」と半次の袖を掴んだ。

「大丈夫ですよ。直ぐに戻りやすから・・・」と優しく言うと、袖を掴んでいたお美代の手を優しく解いた。

半次が部屋から出て行き、薄暗い部屋の中にお美代が一人に残されてしまった。

暗い部屋に一人でいると次第にお美代は心細くなって来た。

しんとした暗い部屋の中にいると何やら人の気配がすることが分かってきた。

「半次さん？」

半次が戻って来たのかと思って、気配のする方向に声を掛けた。

しかし、お美代の問い掛けに応えは無かった。

「誰？誰なの？」

シンとした沈黙に段々と不安になって来たお美代が怯えた声をあげた。

不気味な沈黙にお美代の胸がドキドキと鼓動した。

お美代にとって非常に長く感じられた静寂を終わらせる様に、隣の部屋と仕切っていた襖がスルスルと静かに開いた。

開け放たれた襖の奥から姿を現した男達の姿を見て、お美代がヒッと引き攣った声を上げた。

其処に並んでいた男達は、皆禪一つの裸の上に粗末な半纏を身に纏っただけの、まるで駕籠かき人足の様な格好をしていた。

俗に雲助駕籠と呼ばれる立ちの悪い人足の風体をした男達が、無言で部屋の中に入り込んで来て、お美代を取り囲んだ。

突然の異様な事態に、お美代は声も上げる事が出来ず、恐怖に身を打ち震わせるだけであった。

畳の上にしゃがみ込んだお美代の目の前には、半纏の間から見える煤けた褌を纏っただけの太股と薄汚れた脚絆を捲いただけの脛が目映った。

無言で取り囲む男達に怖ず怖ずと視線を上に向けて行くと、お美代の気持ちが少し明るくなった。

薄暗い灯りではあったが、お美代の正面に立つのは同業の沼田屋の主人であり、その周囲に立つ男達も良く見知っている商店の旦那集の顔であったからであった。

「貴男^{あなた}は沼田屋さん？・・・」

顔見知りの沼田屋が何故自分にこんな悪戯を仕掛けてくるのか、知りたくて思わず声を上げた。

畳の上に尻をつくお美代を見下ろす様に、正面に両腕を組んで仁王立ちした沼田屋は、ニヤッと笑みを浮かべると、

「俺は、沼田屋じゃない・・・箱根の山の山賊さ・・・」

と、ぽつりと言った。

同業の油問屋として商売敵とは云え、これまで互いに売買で^{いが}唾み合った事はなく、同じ商人仲間であるので、道ですれ違えば挨拶位する事はあったが、その都度お美代の全身を上から下まで嘗め回す様に見詰める気味の悪い男だと思っていたが、今こうして沼田屋の異様な風態を見せ付けられると言ひようの無い不安が込み上げて来て、思わず背筋を寒くするのであった。

「お嬢ちゃん、好きな男と駆け落ちして、夜っぴいて箱根の裏街道を逃げようとするのは良くねえな。」

「親に背いて、世間の目を盗んで駆け落ちしようとするから天罰で俺たちの様な雲助に捕まる羽目になったんだぜ・・・」

沼田屋の隣に立つ男達が目に淫靡な光を浮かべながらおめく様に言った。

淫猥な雰囲気のを漂わせながら、ニヤニヤと笑みを浮かべる男達に、お美代の恐怖が次第に舞い上がって行った。

今回男達は箱根山の山賊の役を演じており、訳があつて街道の関所を通る事が出来ず裏道を抜けようとする人々を餌食にして稼ぎを上げる悪質な雲助の芝居をしている様であった

が、思いがけない恐怖に身を震わせるお美代を目の前にして、心まで箱根山の山賊の役に没頭している様であった。

「私に何をしようと言うんです？」

日頃顔見知りではあるが、今は不気味な雰囲気で自分を取り囲む男達に気丈に問い掛けた。

「何もかにも・・・山賊は捉えた女を身ぐるみ剥いで、その身を俺たちで苛んだ後、三島の女郎屋に叩き売るのが商売さ・・・」

男達の真剣な芝居にお美代がヒッと悲鳴を上げた。

「それ！やっちまえ！」

畳に尻を落としたまま後ずさりして逃げようとするお美代に男達が一勢に襲い掛かった。

バタバタと手脚を振り動かして抵抗するお美代の身体を何人かが畳の上に押さえ付け、一人が手ぬぐいを手にお美代の口に押し付け大声を上げるのを防いだ。

その間に残った男達が、着物の帯や襟に手を掛けてお美代の身体から衣類を奪い去って行った。

顔を真っ赤にして抵抗したが、女の力では何人もの男の手に抗し切れず、袋帯を剥ぎ取られ、豪華な振り袖を奪い去られていった。

「へへ・・・良い匂いがして来たじゃないか・・・」

身に纏う物が次第に無くなって行き、肌を直接覆う下着姿が露わになって、上気した身体から匂い立つ、甘美な若い女の匂いが、衣服を略奪する男達の鼻腔を擽った。

次々と乱暴に身を纏う物を強奪されながら、男の豪腕の前に抵抗を封じられたお美代は目に涙を浮かべて、アアッ・・・イヤッ・・・半次さん何処に行ったの？早く助けて！と男に口を押さえられ声にならない悲鳴を上げ続けた。

僅かに上半身を覆っていた肌襦袢がはだけて白い形の良い乳房が男達の目の前に露出した。

溢れ落ちた乳房に思わず男が手を伸ばすと、剥き出しの両乳房を鷺掴みにして揉み上げた。

男の乱暴な行為にくぐもった悲鳴を上げて身を振らせた。

激しく顔を振ったので、綺麗に丸鬘に結われていた長い髪が乱れて肩に掛かった。

とうとう肌襦袢も剥ぎ取られ、お美代の身体に纏う物は紅梅を散らした湯文字一枚を残すのみとなった。

男達は一機に腰のものまで奪い取ろうとせずに、麻縄を手にするとお美代の両腕を後ろにねじ上げ、後手に縛り上げ始めた。

両手を後ろに縛って余った縄が前に回されて、お美代の形の良い小振りな乳房の上下に捲かれて行った。

白い艶やかな肌にベツトリと湿ったどす黒い麻縄が絡み付いて行った。

そのどす黒く変色した縄は、これまでの何度もお銀を縛り上げ、お銀の血と汗と淫液を染み込ませた縄であった。

柔らかな素肌に固く食い込む麻縄が発する女の怨念を染み込ませた気味の悪い感触に、男達が縄を引き絞る毎に、アッアッと小さく悲鳴を上げた。

カッチリと縄止めを終えて、お美代の身体に残るのは白地に紅梅を染めた湯文字と、不気味な色をした麻縄だけとなった。

まだ幼さの残る下ぶくれの顔半分を覆う様に、豆絞りの手ぬぐいで猿轡をされて、声を発するのを防いでいた。

男達は、麻縄に縛り上げられ裸身を晒すお美代を取り囲んで、一仕事終えた様に、まるで生け捕りにした見事な獲物を鑑賞する様に、好色な目でジッと見詰めていた。

一人の男が背後からお美代の身体を羽交い締めにする様に立ち上がらせたので、お美代を取り囲む男達が蠟燭を手に腰を折って下から見上げたり、生け捕りにした小柄な少女を上から見下ろしたりと、シゲシゲと見回した。

「思った通り、良い体付きをしているじゃないかよお！」

きめ細かく染み一つ無い少女の白い肌を目の前にして、興奮の余りくぐもった声で呻く様に感嘆の声を上げた。

好色な男達の刺す様な視線に晒され、お美代は俯いて啜り泣きを続けていた。

「それによお、この乳房も形も綺麗で、その上まるで羽二重餅みたいに柔らかえじゃないか！」

背後からお美代を支える男が突然両乳房を驚づかみにしたので、お美代はビクッと身体を震わせてヒッと喉を鳴らした。

「へへ・・・なかなか感度も良いようじゃないか？」

お美代の乳房を弄びながら男が嬉しそうに呟いた。

哀れな少女は背後から幼い乳房を揉みし抱かれながら、イヤイヤと力無く顔を振り啜り泣き続けた。

「もう良いだろう・・・そろそろ最後のモノを見せて頂こうか・・・」

正面に仁王立ちになった相兵衛が口元を淫靡に歪めて呟く様に言った。

惚けた様に腰巻き一枚だけの裸身を晒すお美代の美しい身体を見詰めていた男達は、相兵衛の言葉にハッと我に返った様になり、新たに淫靡な輝きを目に浮かべてお美代の身体をジツトリと見詰めた。

相兵衛の目配せを受けた男が、お美代の身体を覆う最後の衣類を腰に留める紐に指を掛けた。

男に腰巻きの紐を解かれながら、お美代は啜り泣きを続けていた。

すっかり弛められた腰巻きがゆっくりと大腿の上を下に滑り落ちていった。

堅く絞められた猿轡の下で、アアーッ！イヤ！と悲鳴を上げて涙を流した。

男達の目に乳房を晒すだけでも耐えがたい羞恥なのに、その上女の命を宿す場所まで晒すなど気の狂いそうになる程の羞恥であった。

フワリと足下に腰巻きが落ちた時、周囲を取り囲む男達から感嘆の溜息が漏れた。

男達は蠟燭を手手に隠す物の無くなったお美代の股間を照らし上げた。

四方から蠟燭の光で照らし上げられ、影も作らず明々とその部分の様子が好色な男達の目に映った。

「へへ・・・柔らかい生えつぷりじゃねえか・・・」

「それにどうでえ？このお上品な形の良い繁みはよお・・・」

刺す様な視線を避ける様に、必死に太股を寄せて股間を隠すお美代の股の合わせ目から姿を覗かす漆黒のこんもりと繁った若草を指差して男達が卑猥な声で揶揄を続けた。

男達の好奇な視線で全裸姿を嘗め回す様に観察される羞恥と恐怖心に、後ろから男に支えられるお美代の身体がガタガタと^{ふる}震えていた。

「何時まで眺めていても見飽きないが、そろそろねぐらにご案内しようか・・・」

ウツトリと魅入られた様にお美代の裸身に釘付けになった様な仲間達を見回して、相兵衛が口を開いた。

「さあ、これから新居にご案内するぜ・・・途中で逃げようとなんて考えるんじゃないぜ。もっともそんな素っ裸では逃げようもないか？」

後ろからお美代を羽交い締めにする男が、笑いながらお美代に歩行を促した。

これから何処に連れて行かれるのか分からない恐怖心で硬直するお美代の身体を引き摺る様に玄関まで連れ出した。

ガラガラと玄関の引き戸を開けると、外の通りと遮る板塀との間に、何時の間にか駕籠が留め置かれていた。

目の前に置かれた薄汚い駕籠を目にして、何処に連れて行かれるのか分からない恐怖心で必死に歩行を拒むお美代を男達は左右から腕や腰に手を回して、駕籠の中に押し込もうとした。

嵩に掛かった男達は、無理矢理狭い駕籠の中に押し込むと、駕籠の中でお美代の両脚を取り、ねじ曲げて胡座に組ませた。

薄暗い深夜の闇の中であったので、僅かな提灯の明かりでは、お美代の股間の深部を男達の目に晒す事は無かったが、それでも恥ずかしい部分を大きく左右に抔げられた衝撃に首を左右に振って悲鳴を上げた。

男達はそんなお美代の羞恥にも心を奪われること無く、黙って籠編みにした座面に縄を通して、全開にしたお美代的大腿や足首を固定して行くのであった。

しっかりと座面に両脚を縛り付けられ、例え男達の間を見つけても、駕籠から飛び降りて逃げ出す事は不可能となった。

更に後ろ手に縛り上げた上体を座面を心棒から吊す竹竿に別の縄でキリキリと縛り上げて行った。

これで、例え駕籠が大きく揺れてもお美代の身体が駕籠から飛び出す恐れは無くなった。

藁編みの左右の垂れ幕を降ろすと、完全に周囲から遮蔽され、中に誰が乗っているのか判らない様になった。

準備が調うと、男達は左右に伸びた駕籠の心棒に肩を掛けた。

そしてお美代を載せた駕籠をヒョイッと担ぎ上げた。

相兵衛も別に用意されていた駕籠に首領然とした顔で乗り込むと、男達に担がせた。

鬱蒼とした暗闇の中で二つの駕籠は何処かへ出発した。

嵐の中の乙女

「へえ？これが大黒屋の箱入り娘かえ？・・・それにしても綺麗な身体をしているねえ・・・肌だってまるで油で磨いたみたいに艶々していて、つきたての餅みたいに柔らかじゃないか・・・」

身ぐるみ剥がされて素っ裸のまま、相兵衛達の本拠に連れ込まれ、柱に立位に縛り上げられたお美代の裸身を物珍しそうにお銀が見詰めた。

旦那衆は相変わらず雲助の格好のまま、お美代を縛り付けた柱の回りに車座になって、旨そうに成功の祝杯を傾けながら上機嫌で座り込んでいた。

お美代は、突然自分を襲った運命の変転が未だ理解出来ない様に半ば呆然とし、そして、此処に居る男達は普段自分が見知っている大店おおだなの店主では無く、本当に箱根の山の雲助に拉致されたのではないか—と言うような恐怖に苛まれていた。

そして、男達の眼前に一糸纏わぬ姿で柱に立位に縛り上げられた姿に激しい羞恥に襲われ、項垂れたまま、男達の野卑な視線から自分の秘めたる箇所を護ろうとするかの様に、柔らかな脂肪をおいた白く滑らかな太股をモジモジとにじり合わせるのであった。

お銀は何時の間にか男達がお美代から奪い去った豪華な着物をちゃっかり着込んでいた。大家の若いお嬢さんが身に付ける華やいだ振り袖は、痩せてガサついたお銀の病的な身体にはまるで似合わず、まるで猿が人間の着物を着ている様な珍妙な姿に周囲を取り囲む男達も苦笑するのであった。

「馬子にも衣装って言葉はあるけど、お銀！お前、全く似合わないな！」

と、笑い声を掛けられてムッとした顔をして、振り返って男達を睨み付けた。

自分もお美代に比べて十歳も二十歳も歳が離れている訳では無い・・・せいぜい五歳から六歳位年上なだけだろう・・・それなのに、自分は生まれついて碌な食べ物も食べる事も出来ず飢餓と栄養不良と長年に渡る荒淫でこんなにも肌は荒れてしまい、随分歳の差がある様に見え、綺麗な振り袖を着込んでも男達の嘲笑を浴びせられるだけだ・・・ところが、この娘は幼い頃から贅沢な物を食べ、何の苦勞もした事が無かったからこんな若くて瑞々しい白いしとやかな肌をして、当世流行の豪華な振り袖いまはやりを着ても似合うんだと思うと、ムラムラとした妬み心ねたが込み上げて来るのであった。

お美代の美しい裸身を目に刻みつける様にギラギラとした劣情の熱気を立ち昇らせる男達の輪の中で、お美代の直ぐ傍にまるで男の様に胡座をかいて座り込み、好奇の瞳で自分とは生まれも育ちも全く違う大金持ちの娘の裸身を一箇所ずつ見比べる様に見詰めるのであった。

「どうだ！お銀！お前と違って良い女だろう？・・・とは言っても、此処ではお前が先輩だ！

一つ此处での心構えなんか教えてやったらどうだ？」

まるで、これまで見たことも無い宝石を目にした様に呆然とし、憑かれた様な目で眺め回すお銀の様子に面白そうに相兵衛が声を掛けた。

生まれついてから実の親の顔も知らず、人の非情さの中で育ち、物心付いた頃には男達に身体を弄ばれながら泥水の中で藻掻き苦しむように、これまで生きて来たお銀には、何の苦勞もなく贅沢三昧して育って来たお美代に対して、これからこの少女が変態男達の慰み者に身を落とすんだと分かっても、少しも憐憫の情は感じず、逆に何故かこの無垢な乙女がどの様な地獄の責めを味あうのかと想像するとメラメラと残忍な喜びの様なものが込み上げて来るのであった。

お美代を取り囲んで、互いに酒を酌み交わしながら、生け贅の美女の裸体を賞賛の目で熱っぽく見詰める男達を目線に気づいて、鼻白んで、フン、と鼻を鳴らしてお美代の柔肌にガサついた指を伸ばすのであった。

お美代は、今まで見知っていた大店の店主達が異様な態^{なり}をしてギラ付く目で自分の裸体を眺め回す様子に激しい羞恥と恐怖を感じていたが、その中に混じって、明らかに自分とは住む世界の違う女が女の身嗜^{みだしな}みも知らないかの様に自分の目の前にドツカと胡座座りして、狐の様に陰険な目付きで自分に好奇な視線を送っている事に、何か言いようの無い不安を感じていた。

そして、その女の枯れ枝の様な指が自分の身体に触れた瞬間、まるで気味の悪い毛虫の様な生き物が肌に触れた様に悲鳴を上げて身体をくねらせた。

「おやおや・・・随分気持ち悪そうな声を上げるじゃないか？」

お美代の大げさな拒絶の態度に鼻じらんでお銀が呟いた。

「それにしても随分と柔らかな肌だね・・・指が吸い付きそうじゃないか・・・」

と、独り言の様に呟きながら指先をタツプリと脂肪を載せた腹に埋めた。

そして、指先を柔肌に突き立てた儘、弧を描く様に白く柔らかな腹を撫で回すのであった。

お銀が指先で繊細な肌をなぞる度に、お美代はヒッヒッと小さく悲鳴を上げて、柱に立位に縛られた身体を悶えさせた。

男達は二人の女を取り囲む様に座り、夜鷹上がりの女が大家の娘をまるで玩具で遊ぶ様に悪さをする様子を、酒を酌み交わしながらニヤニヤと淫猥な笑みを浮かべて眺めるのであった。

突然両手を伸ばしたお銀がお美代の両乳房を鷺掴みにした。

いきなり乳房を正面から握られたお美代が羞恥と恐怖で悲鳴を上げて身悶えた。

そんなお美代の狼狽ぶりにも心を奪われる事なく、お銀はお美代の形良く前の突き出した乳房を揉み続けた。

「随分と柔らかくて揉み加減の良い乳房じゃないか・・・タツプリと重みもあるし、お前さん、本当に男を知らないのかい？」

お美代の撓わな乳房を淫靡な仕草で揉み上げながら、羞恥に身悶えるお美代を見上げながら問うた。

「こんな揉みがいのある乳なら旦那衆も随分と喜ぶ事だろうよ・・・」

と、この後この無垢の娘が体験するであろう陵辱の様を思い浮かべて淫靡に唇を歪めた。

一仕切りお美代の両乳房を弄んで、お美代を悶えさせて、飽きたのか、お美代の乳房を揉み立てていた両手を離して、右手の人差し指をお美代の身体に押し当てたまま、中心線に沿ってなぞる様に下降させた。

みぞおち
鳩尾からゆっくりと脂肪を載せた柔らかな腹の中心を滑らせて行った。

ゆっくりとなぞらせて来た人差し指の先が臍の窪みで止まった。

敏感な神経が集中した臍の孔を指先で穿る様に撫で回されて、お美代がヒイヒイと悲鳴を上げて身体をくねらせた。

「ほほほ・・・そんなにくすぐったいかい？可愛い娘だね・・・」

満面に残忍な笑みを浮かべて、悪戯をした後、更に指先を下腹に向かって滑らせて行った。

不気味な女の指先が何処に向かっているかを理解して、お美代が柱に立位に縛り付けられた身体を悶えさせて悲鳴を上げた。

お銀の指先はピッタリと閉じた大腿の合わせ目の直ぐ上にまで達し、小高く盛り上がった女の小丘に繁茂した薄い春草の上をなぞる様に下降して行った。

「まだオボコみたいに可愛い顔をしているって謂うのに、この部分は随分立派に生えそろっているじゃないか？それにしても柔らかな細い毛だね・・・」と、指先で股間に生えた毛を指先で掬い上げる様にして呟いた。

不気味な女に痴毛を撫で上げられる羞恥と言いやうの無い恐怖に身を竦ませた。

そして、指先を固く閉ざした股の間に突き入れた時、お美代は堪えられず甲高い悲鳴を上げた。

そんなお美代の様子を気にする事も無く、何度も指先を前後させて、処女のその部分の様

子を探索するのであった。

しっとりと湿り気を帯びた、秘め処を指先で何往復もさせた後、お美代を襲っていた指先を抜き、自分の鼻先に持って来て、その部分の匂いを嗅ぐ様にクンクンと鼻を鳴らして、
「流石に大家のお嬢様は此処も良い匂いだね・・・そこらの夜鷹とは訳が違うよ・・・」
と、感心した様に呟いた。

お美代は自分の秘めた部分の匂いを嗅がれる恥ずかしさに、涙を流しながら激しく顔を左右に振り立てた。

「そんなに其処の匂いを嗅がれるのが嫌かい？ケチケチせずにもっと処女の匂いを嗅がせておくれよ・・・」

と、言うとお美代のピッタリと綴じ合わせた股間に顔を押し付けた。
繊細な身体の部分に鼻先を押し付けられて、お美代が悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。

「お銀！この娘の其処の様子が随分と気になる様だな？！」
二人の女の様子を淫靡な笑みを浮かべて眺めていた沼田屋が声を上げた。
「もっと其処が良く見える様にしてやろうじゃないか・・・」

沼田屋が隣の店主を誘って腰を上げた。
二人はお美代の両足首を柱に縛り上げていた縄を一旦解いて、左足だけを柱に繋ぎ直し、右足首には新たに麻縄を括り付けた。
そして、その麻縄の先を天井の梁を通して下に垂れさせた。
これまでお銀の悪戯を面白そうに眺めていた旦那衆もイソイソと立ち上がると、梁から垂れ下がった麻縄を手にして、力一杯引き絞りに掛かった。
立位のまま股を大きく開いた姿勢を取らせようとする男達の卑劣な考えを知り、込み上げる羞恥に精一杯抵抗しようとしたが、男達の力の前にお美代の右足が徐々に上に持ち上げられていった。

右足が高く持ち上げられて行く間、お美代はイヤイヤと悲鳴を上げ続けていた。
そんな少女の羞恥の悲鳴が心地良い音に聞こえるのか、男達は開き始めた股間に視線を集中して、ほらほら、少しずつ肝心な部分が見え始めたぜ、とか、もう少しで秘め観音様のご開帳だとか、卑猥な声で囁き立てるのであった。

とうとうお美代の右足は頭より高く一直線に持ち上げられ、股間の様子は前に居並ぶ男達の目に隠しようも無く押し広げられた。

お美代の右足を吊り上げた縄を固定した後、男達はシゲシゲと仕事の出来映えを確認する様にその大きく広げられた部分に目をやった。

「ほほ・・・お嬢さん、良い格好にして貰ったじゃないか」

全身を朱に染めてクナクナと身を振り、羞恥に身悶えるお美代にお銀が嬉しそうに声を掛けた。

そして、再び片脚開脚の姿勢を取らされたお美代の前にドッカと胡座をかいて座り込んだ。上機嫌で鼻歌を鳴らしながら、両手の指先を開き切った仄暗い股間に伸ばして、指先を器用に操って股座^{またぐら}に繁茂した春草を左右に掻き分け、その中心の桜色した秘肉を露わにした。太股の付け根に沿ってキツパリと一条に割れた深い秘裂が男達の目の前に現れ、オウッと男達が溜息を吐いた。

得体の知れない女の手によって自分のもっとも女である部分を暴かれ、そこに男達の飢えた獣の様な鋭い視線が集中している事を感じて、お美代が身を仰け反らしてアアッ・・・と、呻き声を上げた。

男達の感嘆の溜息を背に感じて、気分を良くしたお銀はそのままお美代の身悶えも無視して、深い亀裂を形作る柔肉を押し分け、その奥の柔らかな花弁を一枚一枚解きほぐす様に押し開いて行った。

お美代はこの得体の知れない女に股間をまさぐられ、肉壁を一枚一枚押し広げられながら、身も世も無く熱い涙を頬に流し続けるのであった。

最後の花弁を押し広げ、女の羞恥の花園を全開にした時、「在ったよ！在ったよ！」と大きな声を上げた。

「ふーん！これが処女の証かい？」

秘孔を塞ぐ様に懸かった薄い半透明の膜をまるで神秘的なモノを見る様に声を上げた。

「ふーん！こんなモノが付いていたのかい？私には生まれ付き無かった様な気がするけどね・・・何しろ物心付いた頃には男に抱かれていたからね・・・全く記憶に無いよ。」

と、乙女の証を見詰めながら呟く様に言うのであった。

「仲間にもそんなモノ付けてる夜鷹なんて一人も見なかったし、アンタとは人種が違うのかね？」

「そんなモノ持ってる夜鷹がいたら俺が買いたいぜ！」

お銀の呟きに二人の女を取り囲んで酒を酌み交わし合っている男達から笑い声が上がった。

「もっともこんなモノ、もう直ぐ旦那衆に引き裂かれて無くなってしまうんだけどね・・・」

と、お美代の不安を掻き立てる様に囁き掛けるのであった。

そして、お美代の処女膜を破らない様に注意しながら、開孔した膜の隙間から右手の中指をすりと滑り込ませた。

太くは無いが、いきなり、ガサつく指を肉洞の中に差し入れられ、その瞬間、お美代は激しい衝撃に襲われ、身体を硬直させて、まるで灼熱の鉄棒を差し入れられたかの様に激しい悲鳴を上げた。

男達はお銀の指を根元まで埋没させたその部分に淫靡な視線を浴びせ続けた。

「ふふ・・・中はしっとりと湿って暖かくて良い気持ちだね・・・男達が夢中になるのも判るよ・・・」

お美代の極上の内部を確かめる様、指先で内壁をまさぐったり、指を前後に動かしながらお銀は感嘆の呟きを漏らした。

女の指先ゆえ決して太い物では無いが、生まれて初めてその部分に挿入され、お銀が指先を蠢かせる度にズンズンとした衝撃が背筋を通して脳天まで響き、お美代はウッ、ウッ、と呻き声を漏らした。

「ほほ・・・随分と感じている様じゃないか？アンタはかなり此処の神経も敏感な様だね？・・・旦那さん方、こりゃあ案外掘り出し物かも知れないよ！まだ年は若い磨けばそれなりにモノになりそうな上玉だよ！」

指先をお美代の秘奥に突き立てたまま、取り巻く男達の方を振り向いて上機嫌で笑いながら叫んだ。

「ほら、姐さんの指をギュッと締めてごらん！・・・ほら！どうしたもっと締めないか！」

あいた左手でお美代の尻をピシヤピシヤと叩きながら命令するのであった。

そんな夜鷹上がりの最下層の女に騷り者にされる大店の娘の姿を笑いながら男達は見詰めていた。

一仕切りお美代を騷って満足した様に、埋め込まれていた指を抜き取った。

お銀のいたぶりが終わってホッとしたお美代であったが、お美代の体液に濡れた指先の匂いをクンクン嗅いでみる仕草を見せたり、その指先を口の中に入れて舌先でねぶる姿に、お美代は言いようの無い羞恥に襲われ顔を伏せた。

「あんた、肝心な部分のお汁の匂いも味も随分と良いじゃないか！・・・こりゃ女郎をさせたら客がひっきりなしに訪れるだろうよ・・・」

と、剥き出しのお美代の尻をパンパンと叩きながら羞恥心を逆撫でする様に面白そうに大

声を上げるのだった。

「さて、お銀の言う通り、何時までもそんなモノを持ってて貰ったら後の仕事がやりにくくて仕方無い・・・早速破らせて貰うんだが・・・誰がお美代の初物を頂くか？・・・だが？・・・」これまでお銀がお美代の事を嬲り者にする様子をじっと見ていた沼田屋が、周囲の男達をじろりと見回しながら言った。

沼田屋の言葉に、男達も自分こそ一番にお美代の純潔を奪いたいと思い、熱っぽい目でお美代の身体を眺め回すのであった。

「今回の手筈を整えたのは俺だ・・・先ず、第一に俺がお美代の初物を貰う権利を主張したいところだが・・・」

沼田屋の言葉に、確かに今回の計略は全て沼田屋が整えたモノであり、自分達は唯沼田屋の言う様に動いただけだから、沼田屋が最初にお美代を抱くと言えぱ諦めざるを得ないと思った。

所が、続いて沼田屋は意外な事を口にし始めた。

「お美代の初物は此処に居る皆が欲しい・・・誰か一人が先に新鉢を割ってしまえば、残った仲間の間に遺恨が残る・・・此処は一つ、お銀！お前がお美代の水揚げをして見ねぇ！」

「へえ？私がかい？・・・」

沼田屋の突然の言葉にお銀がキョトンとした声を上げた。

お美代を手に入れた事で、この嗜虐の会の男達は、当然若いお美代を責める事に夢中となりお銀の事を振り返る事は無くなるだろう・・・住む場所を失ったお銀が役人に恐れながら一と、訴えて出られたら自分達の身が危なくなる。此処は一つ、お銀も自分達の仲間に入れお美代を責める役目をさせれば、役人に訴え出る恐れは無くなるだろう一と、考えた。これまでお銀と接して来た経験から、お銀は自分が責められるより、他人を責める方に能力を持つ事を沼田屋は感じ取っていた。

そして、お銀はこれから自分の身代わりに責め苛まれる事になるお美代に憐憫の情は少しも感じておらず、逆に自分と違って贅沢三昧して来た娘一と、敵愾心を持っている。

お銀にお美代を責めさせた方が、これまで性行為の幾山河を経験して来た女として、同性故に女の肉体的弱点を知り尽くした面白い責めをするのでは無いかと、沼田屋は考えたのであった。

お美代の裸身を見詰めながらニンマリと微笑むお銀も、自分がお美代の処女を奪うという沼田屋の命令に満更でも無さそうであった。

沼田屋の指示を受けて何人かの男達が、柱に立位で縛られたお美代の目の前にドヤドヤと大きな戸板を持ち込んで来た。

それは、これまでお銀を性責めにする時に使用した拷問具であり、ぶ厚い木の板の四隅には、戸板に寝かせた女の手脚を大の字に縛り付けて固定するための木製の杭が打ち込まれていた。

白木の板の所々には薄黒くシミの様に変色した部分があり、お美代にはそれが何であるかは理解出来ない様子であったが、これまで何度も陰惨な責め苦に悶える女の脂汗と淫液と情念を搾り上げた戸板から醸し出される不気味な雰囲気には怯えた目を向けた。

ただお銀の場合と違って、体を横たえる戸板の上にさっと薄い布団を一枚敷いた事が、男達が見せた唯一の優しさであった。

準備を進めながら、お美代の右足を吊り上げていた縄が解かれた。

そして、立位に柱に縛り付けられていた縄を背後に回った男が解こうとしているのを、

「ちょっと待って！」とお銀が声を上げて制した。

「お嬢さん、アンタもよおしているね？」

下からお美代の顔を覗き込みながらニヤッと笑った。

「アンタ緊張してて、自分でも気付かなかったかも知れないけど、さっきあんたの下腹を撫でていて分かったのさ・・・」

手の平で下腹を撫で回しながら言った。

お銀の気味の悪い掌の感触に下腹を硬化させた瞬間、体内から込み上げた反発力にウッとうめき声が漏れた。

「ほら、こんなに硬く張っているよ・・・」

お銀の言うように羞恥と緊張で意識する余裕も無かったが、全裸に剥かれてかなり時間も経っており体がすっかり冷えて、膀胱内には限界までに小水が溜まっていた。

お銀の言葉でそれをはっきりと意識する様になると、下腹はパンパンに膨張し、耐え難いまでに尿意が込み上げてくるのが分かった。

男達のねちっこい好奇の視線を受けて、ああ・・・と声が漏れ腰がブルッと震えた。

「ああ・・・お願いします。厠に行かせて下さい・・・」

弱々しい声でお銀に哀願した。

「厠だってさ！この家の厠は此処に居る旦那達しか使えないのさ！女はそこにある桶を使うのさ！」

と、傍らに置かれた木の桶を首をしゃくって見せた。

「これからアンタは好き勝手に糞や小便をする自由は無いんだよ！今後はこの旦那達の前で許しを貰ってからするんだよ！」

下卑た笑いを浮かべる男達の目の前で排尿を迫るお銀に絶望的なものを感じた。

「ところで、旦那。これからは私も旦那達みたいに厠を使っても良うござんすか？」

と、首領格の沼田屋の方を見て尋ねた。

「まあ、考えておこう・・・」

部屋の隅に置かれた木の桶を手にして、柱に立位に縛られたお美代の足元に置くと、

「ほら！この後アンタの水揚げをしなきゃならないんだよ！時間が無いんだからさっさと済ますんだよ！」と、迫った。

ああ・・・嫌！嫌！と、込み上げる尿意にブルブルと腰を振りながら悲鳴の様な声を上げた。

「アンタは我慢し通すつもりかもしれないが、この後アンタの体に乗掛か行って行った時に布団の上にシャーて やられたら私が今夜寝る時に敷くもんが無いからね。さっさと済ますんだよ！」

「アアッ・・・イヤイヤ・・・お願い許して・・・」

我慢の限界を超えて眉根を顰め、硬く目を閉ざして哀願した。ブルブルと腰が激しく震えていた。

「やるんだね？」

と言うお銀の言葉に恥ずかしそうにうなずいた。

「本当は男みたいに立って小便をするところを旦那達にお見せして笑って貰うところだけど、今日は最初だし、可哀そうだから、女らしくしゃがんでさせてやるよ・・・旦那この娘の縄を解いてあげて下さいな。」

男が立ち上げってお美代の体を柱に繋ぎ止めていた縄を解いた。

恐怖と羞恥で体に入らず、その場に崩れ落ちそうになるお美代の体を支えと、もう一人の男が股の間に桶を差し入れた。

「ほら！旦那様達に良く見える様に脚を大きく開くんだよ。」

木桶の上に腰を付いたまま羞恥に股間を固く閉じ、秘められた個所を必死に男の目から守

ろうとするのを、両手を掛けて開かせていくのであった。

限界を超えた状態で太股に力を駕籠めることも出来ず、淫靡な笑みを浮かべる男達の前に股間を広げさせられていった。

好奇心な光を目の奥に浮かべた残忍な男達の前にお美代の股間の淫靡な佇まいが露わとなっていた。

男達は乙女の股間の構造を目に焼き付けようとするかの様に熱い視線を浴びせ続けた。

そして、決定的瞬間を見逃すまいと、桶の上にしゃがみこみ股間を大きく広げて秘所を丸出しにした美しい小町娘を腰を屈めて取り囲んだ。

「さあ！始めて良いんだよ！」

お銀が木桶の上で苦悶するお美代に声を掛けた。

アアッ・・イヤイヤ

限界はとっくに超えていたが、男達の野卑な視線を秘裂にまともに受けて、その筋肉は固く緊張し、腰を震わせるばかりで排泄出来ずにいた。

「さあ！後が聞えているからさっさと済ますんだよ！」と、怒気を含ませて浴びせかけた。

「イヤ！イヤ！堪忍して・・」

股間を男達の目に晒し、木桶の上に腰を降ろしたまま、イヤイヤと首を振り立てた。

「全く、しょうが無いね・・旦那、この娘を元の様に柱に縛って下さいな。」

木桶に腰を降ろして苦悶するお美代を元の様に立位で柱に縛り付けさせると、

「股の間の、小便する穴が良く見える様に開いておいて下さいね・・」

と、両側に立つ男に股間を大きく広げさせ、陰唇を押し開く様に頼んだ。

左右に陣取った二人の男の指で恥辱の谷間を大きく広げられ、その間に秘められた雌芯の構造が目を見舞わせて覗き込む男達の眼前に曝け出された。

男達の目の前に鮮やかな鮭肉色の女の花園があからさまに晒され、赤く充血した可憐な乙女の芽芯が羞恥にフルフルと悶える様に見えた。

次に何をするのかとお銀の動きを見ると、お銀は紙を破いて紙縫^{こより}を作り始めた。

そして、出来上がった紙縫りの先端で剥き出しにされたお美代の尿道孔を触り始めた。

アアッ！イヤ！紙縫りが微妙な部分を刺激する不思議な痛感に驚いて腰を逸らそうとしたが、両側の男が大腿をがっちりと押さえ込んで身動きを封じた。

「ほら、ほら、良い気持ちだろう？」

淫靡な笑みを口の端に浮かべ、目に妖しげな光を浮かべてお銀は燃った紙の先端で陰部の奥に小さく開いた穴を小刻みに刺激し続けた。

「ああ・・・もう！もう！」

お美代が苦し気に首を反らせた。

崩壊の瞬間を捉えたお銀が咄嗟に木桶を掴むとお美代の股間に押し当てた。

その刹那、お美代の放水が始まった。

取り囲む男達から、どっと笑い声が上がった。

男達の野卑な笑い声を受けても一旦始まった激しい崩壊は押し止める事は出来ず、男達の淫靡な視線の中で哀哭の悲鳴を上げながら放尿し続けるのだった。

お美代の股間から噴き出した水は一条の線を描いてお銀の捧げ持つ桶の中に流れ込み、飛沫を上げて激しく桶の縁を叩いた。

「へへ・・・随分と溜め込んでいたじゃないか！凄い勢いで後から後から噴き出してくるぜ！」

「へへ・・・大方お前の店も小金を一杯貯め込んでいるんじゃないか？」

「へへ・・・違いないや！親は金で娘は小便だぜ！」

お美代を取り囲んで座り込む男達は指を指して囃し立てながら笑い合った。

やがて、激しかった放水も次第に弱くなり、ポツポツと雨粒が桶の中に滴るだけとなって行った。

「もう良いのかい？」

お銀の問い掛けに恥ずかし気にうなづいた。

「しかし、アンタも馬鹿な女だね！人が親切に女らしくしゃがんでやらそうとしたのに、男みたいに立小便を始めるとはさ！・・・これじゃ恥の上塗りじゃないか！」

立位で縛られたままのお美代の股間を懐紙で拭き取りながら可笑しくって堪らないと言うように笑い声を上げた。

「それにしても随分と溜め込んでいたモノだね・・・私^{アタ}しゃ桶から溢れ出すんじゃないかと心配したよ・・・」

お美代の体内から排泄された汚水に満たされた木桶を掴んで、「ほら！見てごらんよ！まだ湯気が立っているよ！」と、甲高い笑い声を上げながら男達に見せて回り、お美代の羞恥を逆撫でするのであった。

長時間に渡って柱に立位に縛り付けられ、言語に絶する辱めを受け、縛めを解かれてもホッとする余裕も無く、全身が痺れ切った状態で、そのまま床に崩れ落ちそうになるお美代の身体を男達が慌てて背後から支えた。

これからどうされるのか？と、云う恐怖心で全身が麻痺して身動き出来ないお美代の身体を男達は数人掛かりで抱え上げて、嬉しそうに掛け声を掛け合いながら床に置かれた戸板の方へ運んだ。

男達はお美代を抱えて戸板の上に敷かれた布団の上に載せた。

これから襲い掛かる恐怖にブルブルと全身を震わせながら、身体を硬くして海老の様に丸くして手足を抱え込むお美代の手足を男達は寄って集って掴むと、力尽くで戸板の四隅の打ち込まれた杭の方へ引っ張った。

悲鳴を上げて身悶えるお美代の手首をグイッと杭の方へ引くと、待ち構えていた男達が手首に縄を掛けて、縄尻を杭に巻き付けていくのであった。

こうして、お美代の両手は戸板の隅に固定されてしまった。

布団の上に仰向けに寝かされ、まるで万歳をする様に縛り付けられたお美代は、悲鳴を上げながら、最後の力を振り絞って脚をバタバタさせて男達に抵抗した。

「このアマ！大人しくしねえか！」

本当に山賊に成り切ったように、^{おおだな}大店の旦那に似つかわしくないぞんざいな言葉を発してお美代を取り押さえようとした。

男達はお美代の必死の抵抗に舌を巻いたが、男の力には抗し切れず、次第に疲労から脚の力を失い、両側から足首を絡め取られて行った。

アアッ・・イヤッ！男達の力の前に両脚を左右に割り広げられていきながら、お美代が絶望的な声を上げた。

「へへ・・大人しくおっぴろげるんだよ！ほら、毛黒い股の間が見えて来たじゃないか！」

男の力の前にグイグイと股間を広げられて行くお美代に男達が卑猥な声を掛けた。

「まだ男を知らない生娘にしちゃ立派な生えっぶりじゃないか！」と、あからさまに露出を始めた股間の春草に指を這わせたのでヒィ！と悲鳴が上がった。

どんなに両脚に力を込めても男達の力に抗し切れず、再び男達の眼前に自らの秘めたる場所を晒される事に涙を流しながらイヤイヤと激しく顔を左右に振りたて続けた。

こうして、両足首をカッチリと杭に縄掛けされ、布団の上に大の字に固定されてしまったお美代の姿を飢えた獣の様な目でシゲシゲと見詰める男達であった。

「本当に旦那達はガサツで承が無いよ・・・ほらご覧、お嬢様は青くなって鳥肌が立っているじゃないか。」

お美代が身動き出来ないように縛り上げられたのを見届けると、お美代からちゃっかり奪った豪華な振袖や下着をさっさと脱ぎ去り、男達の眼前で全裸姿となった。

男達はあらためて土気色したがさついた肌で肋骨の浮いた胸に載った貧相な乳房と戸板に括りつけられたお美代の白く柔らかく盛り上がった乳房を交互に見詰め、痩せて骨の浮き出た腰回りとむっちりとした柔らかな脂肪を置いたすべやかな若い裸体を見比べた。

ガッチリと戸板の上に大の字に固定され、身動き出来ず恐怖でガタガタと震えているお美代の傍に寄りながらお銀が呟く様に言った。

「本当に、この旦那達はさ、女の身体の事も考えず、いきなりぶっとい張り型をぶち込んだり、股の間におっ立ったゲテモノを入れたがるんだから・・・心配しなくても良いよ・・・今からお姐さんがとっても良い気持ちにして上げるから・・・」

と、お美代に優しい声で囁き掛けながら、布団と首すじの間に手を差し入れた。

突然得体の知れない女に頭を触られてビックと身体を震わせたが、お銀は、心配しないでも良いんだよ・・・と優しく微笑みながら、そっと後頭部に手を添えて頭を持ち上げさせ、首すじに枕を差し入れるのであった。

そして、櫛を手にとると、乱れた髪を優しく梳かして始めた。

本当に柔らかくて良い髪の毛だね・・・と、髪を撫で上げながら呟いた。

お銀の優しい手の動きで髪を撫でられながら、お美代は少し気分が落ち着くのを感じた。

「ほら！出来たよ！全く可愛い娘だね！」

男達の暴力の所為で乱れた丸髷も綺麗に結い直されて、お銀がお美代を見詰めながらニコリと微笑んだ。

そして、「ほら！そんなに泣いていたら美人が台無しじゃないか。」と、懷紙を手にして涙に濡れた目の回りを拭うのであった。

そして、化粧道具を取り寄せると、不安で青ざめた顔に薄く化粧をし始めた。

頬に白粉を塗され、唇に紅を引かれると生き活きとした美貌が再び蘇った。

「ほら！出来たよ！とっても綺麗だよ！見てご覧！」と、手鏡を取り出してお美代に自分の顔を見せるのであった。

全裸のまま身体を布団の上に固定されたお美代は、不思議な物を見る様にボンヤリと鏡に

映った自分の顔を見入っていた。

すっかり元の若さに溢れる世間で評判の器量を取り戻したお美代の顔に旦那衆も笑みを浮かべた。

それじゃ始めようかね・・・と、お銀がお美代の隣に添い寝する様に身体を横たえた。

不気味な女に横に寝そべられて、お美代が不安そうな顔を浮かべた。

そんなお美代の動揺を見透かしたお銀は、心配しなくても良いんだよーと、自分の頬をお美代の頬に擦り寄せながら耳元で囁いた。

お銀の手が首すじから肩にかけて触れてた時、お美代はアッと声を上げた。

そんなお美代の不安を取り除く様に優しくうなじを撫で、肩から手の先に向かって優しく指先を匍わせていくお銀であった。

お銀はいきなり乳房や局部に手を振れる事無く、それらから遠く離れた場所からそっと手を振れていく事によりお美代の緊張を解いて行った。

お銀のそんな努力が少しずつ実を結び始め、何時の間にかお美代は、全身を這い回るお銀の優しい手指の動きの前の脱力した様に身を委ねていくのだった。

「ほう、旨いもんだな・・・」

周囲で見守る男達が感心してお銀の指遣いに見遣った。

物心付いた頃から男と女の情事の幾山河を彷徨し、女の側から女の感じるツボを心得たお銀の絶妙の技術は、性の事など何も知らない無垢な乙女を聳え立つ性的快感の絶鋒の麓に何時の間にか誘い、頂へと続く甘美な喜びを昂揚させる尾根道の始まりへと手を引く様に誘い上げて行くのであった。

お銀の絶妙な手技の前に少しずつ女としての本性を暴き出されて行くのか、柔肌を繊細な動きで這い回る指先に身を委ねて薄く目を閉じたまま、頬を赤く染めハアと、甘い吐息を漏らすのであった。

柔らかな腹や大腿を撫でていた指先は次第にお美代の肝心な部分にジリジリと迫って行った。アッ・・・と、お美代が甘い溜息を漏らした。

「アンタ意外とおませちゃんだね？旦那達が見ている前で感じ始めたのかい？」

お美代に添い寝する様に横たわり右手で全身に散りばめられた女の快感のツボを刺激しながら呟いた。

布団の上に大の字で仰向けに固定されたお美代はお銀の言葉も耳に入らない様子で、全身を桜色に染めて、半開きの唇からハアハアと息を吐いていた。

不意にお銀の指が最も秘められた場所に触れた。

ヒッと短く悲鳴を上げてお美代の身体が痙攣した。

「ほほ・・・中々感度も良いじゃないか！」

お美代の刹那の反応にお銀が嬉しそうな声を上げた。

「旦那！この娘は中々の掘り出し物かも知れませんよ！初めてなのに、ほら、こんなに股の間を濡らして！」

お美代の秘裂をまさぐった指先にしっとりとした股間の湿り気を感じたお銀は、沼田屋の方を振り返ると、証拠を示す様にお美代の分泌液で濡れた指先を示した。

ほう！大したモンだ！手入らずの乙女をここまで感じさせるとは！一と、お銀の女泣かせの技術に舌を巻いた。そしてお銀をこちら側に一女を責め罵る側に一取り込んだのは正解だったと確信した。

これまで人に晒した事の無い秘められた処女の谷間を巧みに動く指がまさぐり続けた。

「心配しなくて良いんだよ・・・お姐さんに全て任せれば良いんだよ・・・」

お銀の女の弱みを知り尽くした巧みな指先の技術に煽られてアッ、アッと声を漏らして、小刻みに体を震わせるお美代の耳元に優しく囁き掛けた。

巧みなお銀の女体攻めに今やお美代の花園は著しく潤っていた。

沼田屋を見つめてニヤッと口の端に笑みを浮かべたお銀は、カサついた細い中指にお美代の身体から滲み出す粘液を十分に塗り、スルリと秘膜の隙間に滑り込ませた。

ヒィー！お銀の指が体内に侵入した事を感じて体を仰け反らせて悲鳴を上げた。

「ああー・・・良いねえ、本当に良いねえ・・・アンタ旦那達を喜ばす良いお道具をお持ちの様だよ・・・」

お美代の温かく湿った未通の肉洞を指先でまさぐりながら感嘆する様に呟き続けた。

「アアッ！イヤ！イヤ！・・・お願い助けて」

お銀の指の動きに下腹がピクピクと痙攣した。

得体の知れない女から最も秘められた場所に加えられる気味の悪い淫逆行為ではあるが、その巧みに動き回る指先は的確に女芯のツボを刺激し、心では反発しても、これまで経験した事の無い不可思議な快美感を与え続け、女の本能に直接響き続けた。

何時の間にかお美代の精神は甘美な桃源郷の霞の中に溶かされる様に感じ、最早不気味な

女から攻められると謂う現実から忘却し始めていた。

ピクピクと体をくねらせ、うわ言の様な小さな声を発しながらも、雪の様に白かった全身は桜色に染まり、しっとりとした熱を帯び始めた様子からお銀の術中に陥れられたことは明らかであった。

お美代を固定した戸板を取り囲んだ旦那衆は、今は声を上げることもせず、異様な熱気に煽られ目をランランと光らせて二人の女の様子を見つめていた。

お美代の甘美な啜り泣きだけが響く部屋の中には、時折、男達が生唾を呑み込む音が聞こえた。

お銀の手筈により正態を失ったお美代が頂点に達するのは後僅かと感じた男達は、その瞬間を見逃すまいと目を血走らせて、注視し続けるのであった。

突然お美代がクッと短く声を発し、体を痙攣させた。

半開きの唇からはハアハアと荒い息を吐き、花の香りの様な甘い息の匂いが広がった。

「イッたのかい？」

お銀が戸板に横たわったまま忙しなく胸を上下させるお美代に優しく問いかけた。

薄く目を閉じ頬を上気させたお美代がそっと肯いた。

戸板を取り囲む旦那衆からホッと溜息が漏れた。

「手入らずの生娘を指一本でイカせるとは大したもんだぜ！」

沼田屋がお銀の方を向いて叫ぶ感心した様に言った。

「次はこいつを使ってお美代の新鉢を破って見な！」

「そいつを使うんですかい？」

沼田屋の取り出した何やら太くて長い棒状の物を目にしてお銀が驚いたような声を上げた。それは中央に鏢の様な物を付け、その両側には男性器を模したものが取り付けられた筒具であり、とねりこの木を削って作った太くて長い張り型は荒々しい怒張を写し取っただけでは無く表面には幾つもの細かい突起が植えられて禍々しい形状をしていた。

「私なら何とか入っても、いくら何でも初めてのお嬢さんには無理なんじゃないですかい？」と、その毒々しいモノを見つめながら非難する様に言った。

「この後13人の男を相手にしなければならないんだ！これ位のモノで風通しを良くしておかなければ仕方なからう・・・」

お銀の非難を無視する様に冷たく言った。

「仕方ありませんね・・・」

と、渋々淫具を受け取ると、身を起こして、へっぴり越しの姿勢を取った。

そして、その太い木製の道具を握り締めると、自らの大きく開いた無毛の股間に押し当てた。

自らの手で女陰に筒具を埋め込んで行くお銀の姿を取り巻く男達が興味深そうに見つめた。これまでの人生で何度も男の肉塊を受け入れ、面白半分に関客から淫具を突き立てられたお銀の陰唇は、事前に潤していなくてもそのようなモノを受け入れられる身体となっており、その巨大で醜怪な物を呑み込み始めた。

それでも愛液により潤滑されていない肉洞に、いきなり、そのような太いモノを受け入れるのは苦痛であるのか、亀頭を模した最も太い部分が陰唇を押し開く時、思わず腰がブルッと震え、ああ・・・と声を漏らした。

「ああ・・・これは私でもきついですよ・・・」

と、幾多の男達の肉塊を受け入れ醜く変形した女陰に差し入れながら呟いた。

日頃男達から面白半分に関客から剃り上げられているため、隠す物の無い股間の狭間に淡黄褐色の棍棒がやわ肉を押し広げながら奥へ奥へと押し込まれて行く様子がありありと映った。

褐色を帯びた紅鮭色の肉襞の奥にその長い筒状のモノが次第に呑み込まれて行く様子を男達が見守った。

股を大きく広げへっぴり腰の姿勢のまま、ブルブルと腰を震わせながら淫靡な襞を押し開き、自力でじわじわと埋め込んで行っていたが、ウッと声を上げると小さく体を仰け反らせた。淫具の先端が膣の底に当たった様であった。

今や筒具はすっぽりとお銀の胎内に吸い込まれ、二つの怒張を繋ぎ合わせる錨状の部分が大きく寛げられた花園に密着していた。

男達はお銀の傍に寄ると、錨に取り付けられた三本の紐を手に取り、お銀の腰の周りに縛り付け、まるで褌をさせる様に股間をくぐった紐を結び付けた。

「ああ！そんなに強く締め付けないで下さいな！」

男達から強い力で股間を通して締め付けられ、狼狽した声を発した。

「お銀！随分と男みたいな姿になったじゃないか！」

淫具を装着したお銀の姿に沼田屋が笑い声を上げた。

小柄なお銀の股間からは天を突く様に巨大な男性器が突き出し、その滑稽な姿に男達が笑

い声を上げた。

「こうしていると一方が私の体の中にめり込んでいるから、私まで変な気分になって来ますよ！」

自分の秘裂から生え出した木質の光沢のある淫具を物珍しそうに両手で撫でながら、顔を赤らめて呟いた。

その醜怪な表面を撫で摩る度に、その刺激がもう一方の自分の肉洞内に埋め込まれた部分に伝わるのか、男が勃起した自分のモノを自慰する時の様な、痺れる様な感触を感じていた。

面白がって沼田屋が隆々と屹立する筒具の先端を指先で弾いた瞬間、ヒッと小さく声を上げて思わず腰を屈めて下腹を押さえる様子に取り囲む男達から笑い声が上がった。

「どうでい？ 梃子のように相手の動きが自分の奥にも伝わって来るだろう？ これでお互い気持ち良く愛せるってもんだ！」

お銀から絶頂に追い上げられ陶酔状態にあったお美代であったが、すっかり正気を取り戻して、ふと男達が笑いさざめく方に目をやると、股間から禍々しい太い棒状のものを屹立させて自分の方に近づいて来るお銀の異様な姿を気付いて激しい悲鳴を上げた。

「心配しなくて良いんだよ・・・最初の経験がガサツな旦那衆じゃなくて私だってことに感謝することになるよ・・・」

恐怖に身悶えるお美代の横に再び添い寝したお銀が優しく耳元に囁き掛けた。

そして、お銀の股間から生え出した不気味な棍棒で処女を破られるという恐怖に青ざめたお美代の緊張を解すように再び柔肌に指を這わせ始めた。

先ほど恥ずかしくも女の手技により逝かされた快感の残り火を再度燃え立たせるように指先を全身に這わせた。

お銀の指先が官能の中心に触れ、燻っていた残り火を再び目覚めさせた。

ウッと小さくうめき声を上げ、体をくねらせた。

こうなれば、大家の箱入り娘もどうって事無いよ・・・と、お美代の反応に満足したお銀は両手の指先や口唇まで駆使して全身を愛撫してお美代の官能を押し上げた。

薄っすらと瞼を閉ざし、半開きの口から甘い吐息を漏らしながら勢いを増した攻撃を今やまともに受け入れる姿が男達の目に映った。

戸板に大の字に括りつけられたお美代の裸身の上に身を被せたお銀は両手や口唇で全身の

性感帯を撫で摩りながら、股間から生え出した淫具で優しく下腹や股間を撫で回し、その疑似男性器の感触をお美代の身体に覚え込ませた。

扇の様に大きく広げられた股間の中心が熱い愛液で十分に潤っていることを確認したお銀はお美代の上に体を預けたまま、相兵衛の方にふりむき確認する様に目を送った。

「さあ、口を吸ってやるよ」

両手でお美代の顔を支えて正面に剥かせて、そっと唇を重ねて行った。

お銀の手首によりすっかり官能の渦に巻き込まれ、怪しげな桃源郷に彷徨う様に、まともな意識を喪失してしまっているお美代は、魔物の囁きを受け入れるかの様にぴったりと得体の知れない女の唇に自分の唇を重ね、お銀の差し入れる舌先を受け入れて、自らの舌を絡めた。

女同士の濃厚な口接の間にお銀の股間に装着した筒具は、ぴったりとその狙いを定め、すっかり充血し泉のように愛液を溢れさせる秘孔に押し当てた。

ドクドクと熱を持ち何かの刺激を待ちわびるかの様な雌蕊に突然強い圧力を受けて、お銀に口を吸われたまま、体を硬化させた。

その圧力は増々大きくなり、これまで肉洞を覆っていた被膜がブツブツと引き裂かれる激痛が脳天にまで響いた。

鋭い痛みの余り悲鳴を上げようとするのをお銀の口が封じた。

戸板の周りに陣取った男達は未通の肉の祠にじわじわと野太い木棒が埋め込まれて行く様子を固唾をのんで見守った。

苦痛に身悶える内に、最も太い亀頭部分がズブズブと花肉の内に没して行った。

「ほら、入ったよ！初めてなのにこんな太い物を根元まで呑み込むなんて大したもんだよ！アンタ中々こちらの方の素質も有るみたいじゃないか？大店の箱入り娘にしておくのは惜しかったよ！」

張り型を根元まで埋め込み終え、双頭の淫具を仕切る鏝の部分を互いの秘部に密着させながら、嬉しそうに声を上げた。

そして、未体験の淫具の感触を身体の内側から味会わせる様に、お美代の身体に自分の身体を被せたままじっと動きを止めた。

一方お美代は太い杭を身体を中心に打ち込まれたように内側から込み上げる強い痛みと圧迫感に身動きすることも出来なかった。

夜鷹上がりの女に組み敷かれ秘奥を串刺しにされ、全身に脂汗を浮かべハアハアと荒い息をする可憐な小町娘に取り囲む男達が淫靡な目を向けた。

「どうだい？中々いい気持ちだろう？張り型を通してアンタの其処がピクピクするのが伝わって来るよ・・・」

仰向けの姿勢で戸板の上に大の字に固定されたお美代の張りの在る柔らかな身体の上に身を預けたままうっとりする様に呟いた。

「どうだい？この大きさに慣れて来たかい？じっとしててもつまらないだろうから、少し腰を動かしてみようかね？」

膣内にぴったりと張り付いた太いトネリコの質感だけでも苦痛であるのにそれを前後に動かされたらどんなに苦しいかと想像してイヤイヤと首を振った。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ・・・ここに居る旦那達のように乱暴にはしないからさ・・・」と、耳元に注ぎ込む様に囁くと、ゆっくりと腰を動かし始めた。

寸分の隙間も無く淫具に密着していた鮮やかな色を帯びた柔褌がお銀が腰を引く度に体外に捲り出されて来た。

そして、お銀が腰を押し込むと周囲の柔肉を巻き込んで体内に埋め込まれて行った。

その度に痛みとは別の怪しげな感触がお美代を悩乱しイヤイヤと体を震わせた。

「ほほほ・・・アンタも中々のおませちゃんだね・・・この味が判って来たかい？」

ゆっくりと腰を動かし淫具を出し入れしながら淫靡に唇を歪めた。

お美代が最初の刺激に慣れて来たのを確認してお銀の腰の動きも長く深くなっていった。

「アア・・・こうやって女と交わるってのも中々いい気持ちだね。こっち迄変な気分になって来るよ・・・旦那達が夢中になるのも理解できるね・・・」

自分の膣内に埋め込んだもう一方の筒具を通して、お銀がうっとりするような声を上げた。何時の間にかお銀の腰の動きも最初のゆっくりとした動きから次第に早くなりその前後の動きも長くなっていた。

お美代のお銀と繋がる部分を注視して、男達がホッと声を上げた。

お銀が腰を引く度にその肉の祠からは野太い筒具に搔き出される豊富な愛液がこぼれ出していた。

全身を真っ赤に染めてお銀に突かれる度にウッウッと声を上げて体を硬直させる姿が在った。

「ああ・・・良いね！良いね！旦那！この娘は本当に掘り出し物ですよ！初めてなのにこん

なに感じちゃってさ！」

今やお美代の上に馬乗りになって激しく腰をくねらせ、両手でお美代の柔らかな乳房を揉みしだきながら歓声を上げた。

お銀に乳房を揉み上げられながらお美代の乳首が固くシコっていく様子が男達の目に映った。

そして揉み上げるお銀の方も痩せた貧相な乳房の先端の乳首がツンと尖り始めていた。

喜びの呻きを発して、再びお銀が体を浴びせて行った。そして互いに固くなった乳首を擦り合わせた。

お銀が唇を寄せるとお美代も吸い寄せられる様に唇を寄せ、互いに激しく唇を求めあった。

その熱い女同士の交歓を男達が目を見張って眺め続けた。

顔を赤く染め目を薄く閉ざして、ハアハアと荒い息を吐くお美代の様子に、「もうイキそうなのかい？私も何だか変な気分になって来たよ・・・こうなったら二人で一緒に行こうじゃないか・・・」と、痺れる様な快美感にうっとりとしながら口にした。

そして自分自身の性感を押し上げる様に巧妙に腰を使った。

「アア・・・アア・・・もう・・・」

苦しい息の下でお美代が喘いだ。

「もうイキそうなのかい？もう少し我慢するんだよ！姐さんと息を併せて行こうじゃないか！」

今やお銀も全身に汗を浮かべて腰を振り立て、込み上げる快感と対峙していた。

突然、お美代がクッと息を止め体を硬化させた。

それに併せて馬乗りになって激しく腰を使っていたお銀も奇声を上げて体を仰け反らせた。

「見てみるよ！大店の箱入り娘と夜鷹が同時に逝きやがったぜ！」

二人の女が同時に絶頂に達した様子に男達が笑い声を上げた。

力なくお美代の上に崩れ落ちたお銀が、まだ忙しなく息を吐くお美代に唇を寄せて行った。

男達の下品な笑い声も気にならないかのように、二人の女は激しかった行為の余韻に浸るように舌を絡めあった。

お美代の上に身体を伏せたまま、うっとり女同士の交接の余韻に浸るお銀の身体をまるで布団をはぎ取るように沼田屋が乱暴に退かせた。

容赦なく足蹴にされ戸板から転げ出されたお銀の目に、何時の間にか衣服を脱ぎ捨て、劣

情に燃えた目でお美代を睨み付け、これまで見た事も無い程股間のモノを隆起させている沼田屋の姿が映った。

これまでの女同士の絡みを見続けて押さえも聞かない程劣意を燃え上がらせたのだろうと思った。

扇の様に開け広げられた股間の前に膝を着くと、そのまま倒れ込むようにお美代の身体の上に身体を重ねていった。

頭に血が上り押さえも効かなくなったのか、いきなり怒張をその中心にねじ込み、荒い息を吐きながら激しく腰を使った。

お銀の時と違いこちらの身体の時も気にせず、ただ己^{おの}が獣欲を満たすためだけに、乱暴に打ち付ける腰の動きに、引き裂かれたばかりの乙女の祠がキリキリと痛んだ。

周囲を取り囲んでいた旦那衆も、憑かれたように一斉に手を伸ばして、お美代の柔肌に触れてきた。

男達は羽二重餅の様に柔らかな乳房を力一杯揉み上げ、腹や大腿を擦ったが、がさつな男達の手指の動きにはお銀から受けたような繊細さは無く、お美代の心を高揚させ痛みを快美感に代えるような効果は無く、逆に苦痛を増幅するだけであった。

男達から犯されてお美代の口から絶え間ない悲鳴が上がり続けていた。

お銀はお美代を取り囲む男達の輪から離れ、部屋の隅で一人で手酌で酒をあおっていた。

今は何人目かの男がお美代の秘孔を襲っている様子で、既に涙も枯れ果てたのかお美代の悲鳴が輪の中から聞こえて来る事は無かった。

ただ、男達の荒い鼻息の奥から、苦しげな、そして悲しげなすすり泣きの声が漏れていた。相変わらず全裸のままのお銀は一人酒を飲みながら、男達の劣情に刺激されたように股間を開くとその奥に指を沈め、一人慰めた。

「おや、目を覚ましたかい・・・」

布団の中で死んだように眠っていたお美代が目を覚ましたのに気付いたお銀が声を掛けた。昨晚顔見知りの商店の旦那衆から入れ替わり立ち替わり蹂躪される内に意識を失ってしまった事を思い出した。

その途端、獣欲に狂った男達の顔が目の前に浮かび上がり、込み上がってきた恐怖に狂っ

た様に手足を藻掻かせた。

「心配しなくても旦那方は居ないよ。もっとも、今夜またアンタを抱きに来るだろうがね・・・」

少し落ち着いてきて、この家にはお銀と自分しか居ない事が察せられた。

布団を抱きかかえたまま周囲を見回すと自分が座敷部屋の中に作られた牢に閉じ込められている事が分かった。

お銀が興味深そうな顔で、角材を組み合わせた格子の向こうから覗き込んでいる様子が目に映った。

薄い布団に包まった自分の身体が何も衣服を着けていない事に気づき、ハッとして布団を握り絞めた。

男達によって散々狼藉された下腹がジンジンと疼痛を発していた。そっと手を伸ばして擦るとジットリと湿っている事が分かった。指を目の前に持って来ると薄く血が滲んでいる事が分かった。

もう自分は処女では無いんだ！と、悲しみがどっと込み上げて来て、身体を二つに折って鳴き声を上げた。

「アンタは夜明けまで旦那方から輪姦^{まわ}されて、途中で意識を失ったんだよ。それでも旦那達は意識の無いアンタの身体を抱き続けていたよ・・・酷い旦那達だね・・・」

牢の向こうから哀れむように言った。

「お願いします！此处から出して下さい！逃がしてくれたらお礼は幾らでも払います！」

太い格子を両手で握り絞めて、悲痛な声で哀願した。

「止してくれよ・・・そんなことしたら私が旦那方から殺されちゃうよ。あいつら本当に人を殺しかねない残酷な連中だからね・・・」

同情の言葉を発しつつも、冷たい対応をとるお銀に、必死の願いも聞き届けて貰えないーと、格子を握り絞めたままガックリと項垂れた。

「この裏には別棟の小屋が在って、其処にオカネさんと言う婆さんが、一人で暮らしているんだけどね・・・その婆さんが三度の飯を此处に届けたり、身の回りの物を洗濯してくれたり、」

お銀の言葉に、その人に頼めば助けが呼べるのでは無いかと希望を持ち、顔がパッと赤くなった。

「アンタが昨夜尿^{いばり}をした桶を洗ってくれたり・・・駄目だよ！その婆さんに助けを求めて

も！」

話の途中で、お美代がそのオカネさんに頼んで救出される希望を抱いたことに気付いて、無駄な期待をするなどと言うように声を上げた。

「その婆さんは、^{おし}唾で^{つんぽ}鼻なのさ、耳も聞こえなけりゃ、声も出せないんだよ！家に居ても穀潰しの厄介者扱いだけど、此処に居りゃタダで棲む所も貰えて、その上小遣いも貰えるしね・・・薄々此処の事情は気付いているようだけど、そんな事を番所に届け出たら・・・もっても耳も聞こえないし、言葉も喋れないのに届けようが無いけどね。」

と、面白そうに口にした。

「せっかく得た働き口と住む所を失って、元の穀潰しの厄介者さ！だから、関わり合いを持たない様に此処には顔を出さないのさ・・・沼田屋の旦那も都合の良い婆さんを探し出してきたものさ！三度の飯だって家の表に置いて、食べ終わったら表に出しておけば持っていくのさ・・・アンタの昨日使った桶も表に出して置いたから、きれいに洗って戻っているよ！・・・あんな物、置いといたら臭くて仕方ないからね！」

昨夜のお美代の放尿姿を思い出して、笑いが抑えきれないように声を上げた。

「そうそう、もう昼のご飯が届いている頃だから取りに行ってくるよ・・・」

と、立ち上がりながら口にする、暖かい昼食を期待するように上機嫌で立ち去った。

酒宴の華

その日の夜、沼田屋をはじめとするお美代を誘拐した男達が集まって来て、お美代を閉じ込めた檻の外で酒宴を開き始めた。

今回は、雲助の姿では無く、全員大店の主人らしく豪華な着物姿であった。

そんな男達の間をお銀は酒や肴を運んだり、男達に酒を注いで回っていた。

「お美代さんが、一人前の女に成った事を祝って祝宴を上げようじゃ無いか！」

宴席の中央に陣取った沼田屋が赤く火照った貌で嬉しそうに声を上げた。

「今夜の主賓がそんな所に居たんじゃ酒も進まねえ・・・こっちへ来ねえ。」

酒が回って上機嫌の沼田屋が檻の中のお美代に向かって手招きした。

また恐ろしい事をされるーと、恐怖を憶えたお美代は布団を握り絞めたまま牢の奥に後ずさりした。

二人の男がノソッと立ち上がり、檻に近づいて来た。

檻の入口に掛けられた南京錠をガチャガチャと外すと、狭い入口を開けて牢の中にノソリと入って来た。

それは、お美代も良く知っている為替商と廻船問屋の主であった。

男達の目に淫らな光が宿っている事に気付き、「イヤッ！来ないで下さい！」と、青ざめた貌で必死に声を上げた。

怯えるお美代の様子も気に掛ける様子も無く、男達は無言でお美代の手を掴み、握り絞められていた布団を乱暴に引き剥がした。

再び野蛮な男達の前に裸身を露わにした羞恥に悲鳴が上がった。

男達は強くお美代の手を握り絞め、力尽くで敷布団の上にうずくまるお美代を立ち上がらせた。

男の力に抗しきれずフラフラと立ち上がらされたお美代を、一人は掴んだ腕を前から引き、もう一人は後ろからお尻を押すようにして、羞恥に身悶え、恥ずかしい所を隠そうとするお美代を無理矢理牢の外に引き出した。

糸纏わぬ姿で外に引きずり出されたお美代に、男達は「今夜の主演の登場だぜ！」と、喝采を送った。

牢の外で胸と秘所を両手で隠して立ち尽くすお美代に、

「何を畏まっているんでえ！女になった所をもっと皆に見て貰ったらどうでい！」と、嬉しそうに声を上げた。

その場に^{くずお}顔れてしまわ無いようにお美代の身体を両側から支えていた男達が、足下に置かれていた麻縄に手を伸ばした。

そしてお美代の手首を縄で縛ると、お美代の身体を檻の格子に押し付け、そのまま格子に縛り付けた。

今や両手は一文字に格子に固定され、恥ずかしい所を隠す事も、前に倒れ込む事も出来なくなってしまった。

更に男達はお美代の足首にも縄を掛けると、その縄尻を格子に通して思い切り引き絞った。両側から男の力で引かれてお美代の両脚はジリジリと左右に開いていった。

野卑な男達の前に、昨晚蹂躪された秘め所を晒す事になる羞恥にイヤ！イヤ！と泣き叫んだが男の力の前には敵わず、とうとう檻を背に大字型に縛り付けられてしまった。

嗚咽しながら女の亀裂をマザマザと示すお美代の姿に、男達は満足の笑みを浮かべ、手に

した酒を一機に喉に流し込んだ。

「それじゃ、お美代さんに、女になったお祝いをして上げようじゃないか・・・」と、目に淫靡な光を宿らせながら口にして、「おい！」と後ろに居たお銀に合図を送った。

「あいよ！」と沼田屋の意を受けたお銀が立ち上がった。

「しかし、旦那も好きですねえ・・・」と、含み笑いをしながら何かを取りに奥に引き込んだ。

「此処の女はな、大事なお宝はケチケチして隠さずに、何時も丸出しで見せるっーてのが定法だ！お前も女になったお祝いに前の物を剃り落としてやるぜ！」

「そうだよ！私だって何時も剃り上げているんだからね！」と、お銀が着物の裾を捲ってお美代に見せ付ける様に股間を露わにした。

その剥き出しの大腿を指さしながら、「そんな薄汚い物を見せるねえ！」と、酒に酔った男達が大笑いした。

「何さ！今まで私の此処に散々突き立てて鼻を鳴らしていた癖に！」

お銀の不機嫌な様子に、また男達からどっと笑い声が上がった。

笑い声を上げながらも、男達は若くて美人のお美代が此処に来たからには、お銀を抱く男は、最早居ないだろうと思った。

こうして、開腿の姿勢で男の前に曝されるだけでも恥ずかしくて仕方無いのに、更に陰毛まで剃り上げて秘部を丸出しにしようと云う男達の陰湿さに背筋がゾッとするものを感じた。

お銀がお湯を張った手桶と、手拭いと、カミソリを持ってイソイソと戻って来た。

自分の閉じ込められていた檻に立位で大の字に縛り付けられたお美代の足下に、持ち込んだ道具を並べると、お美代の前にドッカと腰を降ろし胡座をかいた。

お銀の見詰める正面には大きく左右に拵げられた太股と女を中心が在った。

お銀はその牝芯を飾る春草に手を伸ばしそっと撫でた。

お銀の指先を恥ずかしい^{くさむら}叢に感じ、ヒッと悲鳴を上げて身体をくねらせた。

お銀はそんな反応も気にならないように陰毛を撫で続けた。

「柔らかくって、真っ直ぐで良い毛だね・・・」

お美代の艶を含んだ黒い春草を指先で^す梳きながら、うっとりとするように口にした。

「男と何時も^{まぐあ}交合していると、擦れ合って縮れてきて、磨り減ってきて短くなるんだよ・・・昔の私がそうだったよ・・・もっとも今は旦那の命令で何時も剃り上げているから、そもそも無いけどね・・・」

お湯で湿らせた手拭いを股間に押し当てながら、「此処に居る限りアンタもココの毛を剃り上げて何時も丸出しでいるんだよ。」と、諭すように呟いた。

水分を吸ってシットリと柔らかくなった叢の端にカミソリを押し当てた。

お銀がスッとカミソリを引くとパラパラと何本もの春草が剥ぎ取られていった。

「動くんじゃ無いよ！怪我するよ！」

羞恥の余り身悶えるお美代に声を掛けた。

牢格子に立位で縛り付けられ、咽び泣くお美代の股間ではお銀がせっせっとカミソリを走らせていた。

見守る男達の目には、もうそれが僅かしか残ってない事が分かった。

「ほら！出来たよ！」

お銀が嬉しそうに声を上げた。

男達の目にも童女の様な割れ目を曝すお美代の姿が映った。

しかし、そこは童女と呼ぶには余りにも艶めかしいモノであった。

その白桃の様に柔らかく瑞々しい股間のコンモリと盛り上がった恥丘の直ぐ下から一文字に切れ込んだ女の峡谷が隠す物も無くマザマザとさらけ出されていた。

「随分と可愛くなって、驚くよ！ほら、見てご覧！」

お銀は手鏡を持ち出して、ソコの様子をお美代に目に入れようとした。

「見なくちゃ駄目よ！アンタはこれから何時もその姿を旦那様方に見て頂くんだよ！」

お銀の言葉に薄く目を開けたお美代は、そこに映し出された生々しい女の姿に思わず顔を背けた。

今、お美代は畳の上に尻餅を着く形で両脚を思い切り左右に押し広げられて座敷牢の格子に括り付けられていた。

そして、身体が前に倒れ込まないように、両手を頭の上に伸ばす形で格子に括り付けられていた。

身体の柔らかなお美代だからとれる姿勢で、左右の足をほとんど一直線に引き伸ばされているため、もっとも隠しておきたい、女がもっとも女であることを示す場所もあから様に

正面に陣取って卑猥な視線を送る男達の目に晒されていた。

「へへ・・・邪魔な毛がすっかり剥ぎ取られて大事なところが丸見えじゃないか・・・」

お美代の大事な部分を覗き込みながら手にした酒を流し込んだ。

限界まで両脚を捻じられているため、その中心に存在する秘密の花園はパツクリと開き、隠しようも無く男達の目に晒されていた。

「昨日、無理矢理突っ込み過ぎて、腫れ上がっているじゃないか。これは今日は無理だな・・・」
剥き出しの股間の正面に赤く開いた膣口が痛々しく腫れ上がっている様子を目にして呟いた。

「前を使えなければ後ろを使えば良いだけの話さ・・・」

一番の残酷性を持つ沼田屋相兵衛がぼそっと呟いた。

「えっ？後ろって？」

沼田屋の呟きを耳にした男が意味を図りかねて問い返した。

「今日の客はこれだけじゃ無^ねえ・・・実はもう一人呼んであるんだ・・・」

沼田屋の意外な言葉に居合わせた旦那衆は、驚いた顔をして沼田屋の方に振り向いた。

驚いた表情を浮かべる男達を無視して、奥の方に振り向いて、「おい！入^いって来な！」と呼びかけた。

「へえ・・・」と、奥から返事が聞こえた。

部屋の奥の闇の中から、まるで幽霊が出現するように、足音も立てず腰を折って若い男が進み出て来た。

それは、お美代誘拐に活躍した‘拐かし屋の半次’であった。

意外な男の出現に場がシーンと静まりかえった。

その場の張り詰めた空気も無視して半次は中央まで進み出ると、「これはこれは、お美代さん、何とも目のやり場に困るような格好にされてしまいましたね・・・」と、呼びかけた。

突然声を掛けられて、無意識にそちらの方を振り向いたお美代は、そこに半次の顔を見つけて慌てて俯いた。そして、心底愛した男から恥ずかしい姿を見られ、込み上げる羞恥に身悶え、顔を赤らめた。

唇を噛みしめモジモジと身体を蠢かすお美代の様子を見詰めながら、「お美代！お前まだ半次の事を惚れているんじゃないか？・・・残念だったな、半次は元々お前を拐かすため俺が雇った男だったのさ！」と、酒に酔った顔で嬉しそうに笑い上げた。

沼田屋の言葉に、全ては罠だったのだと思い知らされたお美代は、自分が惚れた男に欺さ

れていたという事実には悔しさがジワジワと込み上げて来た。

「半次！約束通りお前に褒美を呉れてやるぜ！」

「へえ、有り難う御座んす！・・・こう云う商売をしてますとね、私^{あつし}の絡んだ女は直ぐ郭に売られていって、実は余り抱いた事が無いんですよ。・・・商売柄、お美代さんの腰回りを見てましてね・・・これは実に美味しそうな娘だと、ずっと思っていたんですがね・・・」

と、口元に淫靡な笑いを浮かべながら近づいてくる半次に、怒りを込めた目で睨み付け、「イヤ！来ないで！」と、叫び続けた。

「お美代さん、アンタも馬鹿な娘だね。親の言う事を聞いていれば、こんな目に遭わなかったのにさ。」と、頭の上で一つに縛り上げられた手の縄を牢格子から解きながら話しかけた。

縄は格子から外されたが、両手首の所で一つに縛られた縄はそのまま、支えを失って不安定になったお美代の背を半次は蹴り下ろした。

半次の突然の暴力に悲鳴を上げたが、両脚を一直線に伸ばして格子に括り付けられていたお美代は体勢を崩して、そのまま壁が倒れるように俯せに畳の上に倒れ込んだ。

限界まで脚を捻じらせられ、俯せのまま身動きの出来ないお美代の足首を結んでいた縄を解きほぐした。

両脚の縛^{いまし}めを解かれて、自由になったが長時間に渡って全開に開脚状態にされていた脚は直ぐに動かす事が出来ず、俯せの姿勢のまま憎い男に剥き出しの股間を晒す事になった。

そんなお美代の痺れ切った脚を折るように曲げさせ、お尻を高く擡げ、自分の方に向くような姿勢を取らせると、酷く傷ついた股間を繁々と眺めた。

憎い半次にその部分を繁々と見詰められる恥ずかしさと悔しさに畳に顔を埋めながら咽び泣いた。

「ふーん、これは旦那達に酷くやられて随分と傷付いてますね・・・これは当分使い物にならないですね・・・」と、間近からその部分を見詰めながら口にした。

「よし！それなら私はお美代さんの後ろの初物を頂くことにしましょう！」と、口にした。

「半次！お前、後ろの穴もイける口か？」

半次の言葉に相兵衛が、面白そうに尋ねた。

「へえ、こう云う裏家業をしていれば、前の穴でも後ろの穴でも、男でも女でも何でもやりますよ・・・」と、悪びれずに答えた。

そして、見詰める男達の視線も気にせず、着ている服を次々と脱ぎ始めた。

無駄肉の無いスラリとしたシミ一つ無い白い身体が現れた。

賞賛するような目線の中で褌をクルクルと解き始めた。

全裸となって、股間から現れたモノに男達は驚きの声を上げた。

「半次！お前大層立派なモノを持っているじゃないか！」

まるで日本刀の様に見事に反り返った鋭利な形をした男のモノに男達の目が釘付けとなった。

「へえ、商売柄こういったモノも必要となる事もありますからね・・・」

時には女と肉体関係を持って拐かす事もあると男達に向かって説明した。

「それじゃ、お美代さん、参りますよ・・・お美代さんも恋しく思っていた私に初物を捧げる事が出来て嬉しく思うんじゃないでしょうかね。」と、含み笑いしながら声を掛けた。自分が心底愛した男が実は裏切り者であり、自分を地獄に叩き落とした張本人であると知り、今またその憎い男から犯されようとしている事実に身体がブルブルと震えた。

不自由な姿勢で半次に向かってお尻を曝すお美代の裸体に半次の手が伸びた。

憎い裏切り者の手が柔肌に触れた瞬間、嫌悪の感情が一機に込み上げ、まるで熱鉄を押し当てられた様に引き攣った叫びを上げたが、お美代の反射的な反応も無視して、背中といわず、太腿といわず、尻といわず、半次は次々と柔肌をまさぐっていった。

女との情事を犯罪のタネにしていると豪語する半次の掌の動きは大した物で、シットリと滑らかなお美代の柔らかな肌に絡みつки、せかせかと動く指先は確実にお美代の性感を捉えていた。

初めの頃は蛇が肌を這い回る様に嫌悪していたお美代であったが、何時の間にか半次の指にゾクゾクとするような刺激を受け始め、乳を練ったように柔らかな白い肌が、半次の指先が通った跡は、桜色に染まり、甘いアエギ声が漏れるようになっていた。

半次の魔手により性感を昂揚させられるお美代の姿を見て、取り巻く旦那衆も、「巧いもんだな・・・」と巧妙な手技を見つめた。

半次の精緻を極めた愛撫により、性感を昂ぶらされたお美代の牝芯は充血を始め、甘い匂いを起ち昇らせていた。

ハアハアと呼吸を荒げ、意識もそぞろになって来たお美代が倒れないよう両手で双臀を支えながら、突然半次がお美代の二つの尻肉の間に顔を埋めた。

突然半次から菊の座に唇を押し当てられてお美代の口から引き攣った声が漏れた。

身体の中の不潔な部分と思い込んでいた所に口づけされ、込み上げる恥ずかしさに狼狽して尻を振って逃れようとするのを半次は両手で双臀をガッシリと押さえ付けて動きを封じた。

お美代の狼狽ぶりを無視して唇で菊花の周りを這い回ると、次に舌先を伸ばして菊の蕾の中心を突いた。思いもよらなかった半次に攻撃にお美代の身体は金縛りに遭ったように硬直した。

固く硬直した花弁を解きほぐすように半次は舌を蠢かせ続けた。

その部分に舌先の攻撃を受けてむず痒いような感覚にお美代が切なげに声を発した。

お美代の緊張が緩んだのを見逃さず半次は舌先を窄めてスリとその内部に突き立てた。半次の熱い舌先をその部分に感じて電気が流れたような衝撃を受けて悲鳴の様な声を発した。

お美代の反応に気を良くした半次は更に舌を伸ばすと、その内部を嘗め回した。

その経験した事のない内から込み上げる刺激に堪らずお美代は身体をブルブルと震わせた。半次から口を使って尻穴を責め立てられながら身悶えるお美代の様子を目にして男達からホウと言う声が上がった。

激しく身悶えながらもお美代が感じ始めている事が察せられた。

この娘はこんな所でも感じるのか？と、信じられない思いで見詰めた。

菊の座の中心部も男の唾液で充分潤滑され、頃は良しと見た半次はお美代の腰を支えたまま股間から屹立した七首をお美代のその部分に宛がった。

突然異様なモノを不浄な部分に押し当てられお美代はヒェと喉を鳴らした。

お美代の驚いた様子も気にせず半次はそのままグイッと腰を押し付けた。

半次の口技により十分に潤い弛緩していた部分は、そのまま半次の男の部分を受け入れた。半ば半次の陰茎が埋没した所で、お美代の身体は思い出したように輪状の筋肉を収縮させ半次のモノを絞め上げた。

その強い緊縮感に一瞬半次の顔に喜悅の表情が走った。

そして、その強い締め付けを楽しむように腰を押し出すと、ズブズブと根元まで埋め込んで行った。

流石のお銀も美青年が剛刀を美女の肛門に突き立てる様子に、金縛りに遭ったように身動

きも出来ず熱い目で見つめた。

思いもよらなかった所に半次から突き立てられ、お美代の頭は混乱したが、その部分から伝わる熱く熱を持ったズキズキとする感触にクラクラするようなものを感じた。

お美代のそこを深く抉ったまま半次が緩やかに腰を動かし始めた。

半次の動きに併せてお美代の口からアアッ、アアッと鼻に掛かった呻き声が漏れ始めるのを男達は聞き逃さなかった。

額に汗を浮かべ、苦しげに眉根を寄せ、固く歯を食いしばって半次の狼藉に堪えているが、半次の腰の動きに身体が反応始めている事がジッと見詰める男達には明らかに判った。

何時しか半次の腰の動きに併せて自らの尻を蠢かせて甘い声を発しながらそれを迎え入れる様子が目に映った。

半次が息を荒げて腰の動きを激しくするのに釣られる様にお美代の甘い呻き声も激しくなっていた。

半次の責める僅か下の華洞が潤い始め、蜜を滴らせ始めた事に何人かの男は気付いて、息を呑み込んだ。

長時間に渡って後孔による男女の性愛を取り巻く男達に見せ付けた後、突然、半次が腰の動きを止めた。

お美代のソコに突き立てたままビクビクと腰を痙攣させる様子から堪えに堪えていた緊張を解いた瞬間であると判った。

それに併せる様にお美代も背中を仰け反らせて絶頂を迎えた。

昨日まで処女だった小娘が尻穴に男を咥えて登り詰める様子に男達は啞然とした顔を浮かべた。

沼田屋から杯を受けて美味そうに飲み干す半次の見詰める先には、豊かに張った尻をこちらに向けたまま死んだように横たわるお美代の姿が在った。

半次の後に続いて相兵衛や多くの男達から、何度も突き立てられ肉地獄を彷徨わされたその部分は、周りを取り囲むように酒盛りする男達に向かってポツカリと口を開け、中から男達の放出した白い物が流れ出ている。

「お美代が突然居なくなったって、大黒屋では上を下への大騒ぎになっているって噂ですよ・・・」

半次がその様子を面白そうに説明した。

「そうらしいな・・・」

沼田屋は、別に驚いた様子も見せず返答した。

「お美代の姉のお志津も心配して嫁ぎ先から暇を貰って実家に帰って来て、あちこち必死に探し回っていると云う話ですよ・・・」

半次の言葉を耳にした男達が不安な貌を浮かべた。

此処に集まった旦那衆も大黒屋の噂話は耳にしていた。

お美代が若いツバメと駆け落ちしたらしい事は、直ぐに判明したようだが、自分の所の箱入り娘が男と駆け落ちしたなどと世間への体面上口外することは出来ず、大ぴらに探すことは出来ずに内々に探し回っているらしい。

しかし、いくら箝口令を布いてもその様な話は自然に洩れ出し、口さがない世間の人々の間で、尾鰭が付いて面白可笑しく噂話となっていた。

大黒屋の助平娘が男漁りをしている内に色男と良い仲になり駆け落ちした一との話がまことしやかに流されていたが、その情報の震源地は、実は沼田屋が雇った裏家業の者達であった。

嗜虐者達もその様な噂話を耳にしながら、まさかお美代が街外れの一軒家で自分達に身をひさいで肉地獄の生活をしているだろうとは、当に『お釈迦様でも気が付くめえ』と、内心愉悦感を感じていたのだった。

しかし、姉のお志津が実家に戻って来て、日夜必死に探し回っていると聞いて不安を覚えたのだった。

あの妹思いの姉が必死になって搜索したら、何時か此処に辿り着くのでは無いかと思った。そして、この悪事が露見した時、自分達はどのようなのだろうと不安を感じた。

姉のお志津も事情が事情だけに嫁ぎ先には、本当の事は言わず、暇を貰って帰って来ているのだろうが、嫁ぎ先でも世間の噂から薄々本当の事は気付いていて、それを承知でお志津の行動を許しているのだろうと思われた。

「半次！もう一つ頼まれてくれないか？」

沼田屋が半次の方を振り返って言った。

「へえ、何でしょう？」

「姉のお志津も拐かして此処に連れてきてくれ・・・」

と、口の端に淫靡な笑いを浮かべながら言うのだった。

次なる誘拐

「半次、首尾はどうだ？」

あれから十日程経っていた。その後の進捗状況を確認するため、沼田屋が半次を呼び出していたのだ。

「へえ・・・あんな身持ちの堅い女も初めてですよ・・・ありゃ、心底亭主に惚れきっていますね・・・」

半次が女を口説き落とす際には、女の心の隙を突いて得意の拐かしの術を掛けるのである。どんな身持ちの良い女でも心の何処かには隙が有るものだーと、信じている半次だが、今回はお志津の亭主を想う気持ちが強くて、隙が無いと呆れたように話すのであった。

「^{きすが}流石の拐かし屋の半次にも拐かせない女が居たって事か？」

沼田屋が可笑しそうに声を発した。

「直ぐには無理って事ですよ！・・・時間をかければあの女を旦那の前にお連れしますよ！」
相兵衛の笑い声に沽券に傷つけられた様に、ムキになって言い返した。

「まあ、その時間が無いんだ・・・良いか、半次。俺の言う事を良く聞け・・・先ずお志津にはお美代の搜索を手伝ってやるとか言って、なるべく二人で町中を歩き回る様子を世間の皆に見せるんだ・・・」

「一所に居る様子をですか？・・・」

半次が意外な貌をした。

半次のこれまで拐かしに到るまでの方法は女と密会を重ねる事、即ち人目に立たないように密かに進めるのが常道であった。女も男と情を通じている事を世間には隠しておきたいので、周囲の誰も気付かず、犯行後も世間に半次の事がバレる事は無かった。

そして、それは次の女を拐かす際にも有利であった。

しかし今回は、わざと志津と居る所を人目に曝せと言われたのだ。

大黒屋としてもお美代が情人と駆け落ちした事は薄々気付いていた。

それは、世間体の良い話では無かったので、内々にお美代を搜索していたのだった。

姉のお志津も婚家には事情を告げず、ただ単に暇を貰って実家に帰って来て、実家から探

し続けていた。

沼田屋の指示を受けた半次は、妹が行へ不明になって可哀想だと同情する振りをして、お志津に動向して搜索を手伝う振りをしていたのだ。

そして、日中二人で通りを歩き回り、お志津と並んで歩く姿を人々の目に見せ付けたのだった。

半次は、お志津と連れだって歩きながら、お志津の事を繁々と観察した。

歳は二十歳を幾つか過ぎているはずであったが、結婚してから2年程経ちお新造さんとしての落ち着きを見せ、それが成熟した女としての色香を漂わせていると感じた。

亭主と閨を重ねて、それなりに性感も開発されているだろうと想像させた。

お美代の何処か幼さの残る顔立ちと比べ輪郭のハッキリした細面の顔立ちで、目鼻の作りもしっかりとしており、それが妹を心配する故か緊張を漂わせる表情が、きりっとした美貌を形作っていた。

そんな、半次の下心にも気付かずに、毎日脚を棒にして町中歩き周り、聞き込みを続け、可能性のありそうな場所を探すのであった。

そして、ある日半次はお志津にこう告げた。

「お志津さん、^{あし}私^はこう見えても結構顔が広くて裏の世界に通じております。実は裏の世界から有力な情報を掴みまして・・・もしかしたらお美代さんに会わせてあげる事が出来るかも知れませんぜ・・・」

半次の言葉に急に顔が明るくなったお志津は、

「半次さん！本当ですか！直ぐに会わせて下さい！」と、声を張り上げた。

「旦那！駄目ですよ！そんなに力一杯衝いても、女は痛がるだけですよ！」

立位で柱に縛り付けられたお美代の股間に野太い筒具を押し入れている男に、隣に立ったお銀が指導する様に声を掛けた。

「^{うるき}五月蠅いなあ！俺はこの女を気持ちよがらすため突いているんじゃないんだ！この女の苦悶する顔が見たいから突いているだけだ！・・・それに、見てみろ！痛い痛いと言いながらもこんなに濡らしているじゃ無いか！」

お美代と自分の傍に立ち、一々指図するように口を挟んでくるお銀に材木屋の若旦那の清衛門が口を尖らせた。

清衛門が言う通り、深々と突き立てられた淫具とそれを喰い絞める柔らかな襷の隙間から

はネットリとした淫液が滲み出し、男が激しく抜き差しするのに従って掻き出されるように溢れ出し、太股を濡らしている様子が目に映った。

お銀としては、お美代と大して歳の違わないこの若者に女の扱い方を教育するつもりで口を差し挟んでいたのであるが、お美代のソコの様子を眺めて、この娘も此所に居る嗜虐者達に捉えられてから、半月余りしか経たないが、本人も気付かない内に、辱められ虐待されるほど、ソコを濡らすように肉体を改造されつつある事を認めて目を細めた。

夜もとつぷりと更けた例の隠れ家には、沼田屋をはじめとして全ての嗜虐の会の男達が揃っていた。

男達は酒を酌み交わしながらも互いに言葉を発する事は無く、ただ何かを待つように、一人の男から責め立てられるお美代の身悶える姿を粘っこい目つきで眺めていたのだった。

この間、代わる代わる男達から思い思いの狼藉を受けたお美代は、今新たに淫虐の劣情に燃えた男から秘所を責め立てられているのであった。

男達の笑い声や嬌声も無い、何故かシンとした空間には重苦しい空気が立ちこめ、ただ、お美代の悲痛な呻き声だけが流れていた。

既に一刻（2時間）近く男達の慰み者となったお美代は正常な意識も薄れてきた様子であったが、それでも眉間に固く皺を寄せ、歯を食いしばって男の攻撃に耐えていた。

その時、静かにこの隠れ家の木戸が開く音がした。

嗜虐の会の旦那衆は新たな獲物が到着した気配に色めき立った。

沼田屋の目配せを受けた男が、お美代が騒ぎ立てないように、お美代の背後に回ると手拭いを擦り合わせて嚴重に猿轡を咬ませた。

灯りも無い街外れの四方を塀で囲われた敷地の中に二つの駕籠がこっそりと入って来た。

駕籠を担ぐのは沼田屋が雇った裏家業の男達であった。

最初の駕籠の垂れ幕を内から捲り上げ、半次が降り立った。

そして、地面に降ろされた二つ目の駕籠に近づくと、藁を編んだ垂れ幕を捲り上げ、

「さあ、お志津さん、約束通り妹に会わせて上げますよ・・・」と、声を掛けた。

駕籠の中には緊張感に頬を強張らせたお志津が居た。

お志津は、駕籠の中から油断の無い目で半次の方を見つめた。

そんなお志津の様子に躊躇する事無く、薄笑いを口元に浮かべて、お志津の手を引いて駕

籠から降ろした。

外の様子に気付いた沼田屋達が提灯を手にしてゾロゾロと東屋^{あずまや}から出て来た。

そして、駕籠から降ろされたお志津を目にして、喜色を浮かべた。

「これは、これは、お志津さん、暫く見ない内にご新造さんとしての落ち着きと色香が出て来ましたね・・・」

淫靡な笑みを浮かべる沼田屋が提灯をお志津の顔の傍に持って行き、表情を伺うようにして声を掛けた。

今回の捜索を通じて妹の失踪の裏に沼田屋が居るのでは無いかと薄々感じ始めていたお志津は、そこに沼田屋相兵衛の顔を認めて、自分の推察に間違いが無かったと確信して、無言のまま憤怒の籠もった緊張した目で睨み付けた。

沼田屋と共に東屋からゾロゾロ出て来た男達も、お志津が逃走しないよう、無言で周りを取り囲んだ。

この男達の顔を目にして日頃顔見知りの旦那衆であることを確認すると、この男達も沼田屋とグルであったことを認識させられ、睨み付けるように取り囲む男達を見廻した。

嗜虐者達はお志津が騒ぎ出さないよう、油断の無い目で様子を窺っていた。

「お志津さん、何をそんなに怖い顔しているんですか？」

そんなお志津の怒りの籠もった視線を無視して、ニヤニヤと笑みを浮かべながら、

「お志津さんもお美代さんのことを大変心配していたのでしょうか？御察しの通り、お美代さんは此処に居ます。さあさあ、妹とのご対面や！」と、嬉しそうに口にした。

「沼田屋さん、うちの妹がどうして此処に居るのですか？」

不気味な男達から取り囲まれる緊張感に恐怖を覚えながらも、気丈に沼田屋に向かって問い詰めた。

「さあ？それは直接妹さんから聞いた方が良いのでは無いですか・・・」と、しれっと受け流した。

沼田屋が相好を崩して、先頭に立って腰を屈めるようにお志津を誘って進んだ。

その周囲を男達を取り囲むようにゾロゾロと歩を進めた。

自分の方をチラチラ覗きながら薄気味悪い笑みを浮かべる男達が何時も見知っている商店の旦那衆であることに何か背筋にゾッとするものを感じた。

ガラガラと引き戸を開け、ゾロゾロと男達が建屋の中に入って来た。

その中に混じって髪を島田に結った美貌の若い女が連れ込まれて来る様子にお銀は驚いた顔で見詰めた。

お志津の方も薄暗い土間の中に狐の様な陰険な顔をした不気味な女が立って自分に鋭い視線を送っていることに気付いて緊張で顔を硬わばらせた。

そして、その女がまるで不似合いな若い女が着るような振袖を身に纏っていることが、妙に気になった。

男達に促されて、上がり^{がまち} 框に上がった。

その時、正面の襖^{ふすま}がスッと開いて、緊張で青白い貌を浮かべていたお志津の口からヒィ！と、声上がり、目を見開いてそれを凝視した。

奥の部屋には妹のお美代が全裸のまま立位で柱に縛り付けられていたのだ。

そして、剃毛され隠す物の無い股間には太い張り形が深々と突き立てられていた。

お美代の方も意識が朦朧とする中ではあったが、突然正面に姉の顔を見つけて、猿轡を填められた口から声にならない悲鳴を上げた。

突然の事態に、意識はすっかり蘇り、真っ青な顔になって血走った目で姉の方を見つめ、そして、全裸姿を姉の前に曝している羞恥に貌を赤く染めて、悲鳴の様な声を発して顔を逸らした。

上がり框から部屋の中に駆け込み、必死になって妹の傍に駆け寄ろうとするのを男達が食い止めた。

全裸の妹を前にして怒りを露わにして、相兵衛に向かってキッと睨みつけ、「沼田屋さん！これが人のすることですか？酷すぎます！」と、怒声を浴びせ掛けた。

「この娘はな、男と遊ぶ金欲しさに俺達から借金をしていたんだ。流石に親から無心出来なかったのだろうな。それが期日までに返済出来なくなって約束通り俺達に身体を預けることになったのよ・・・」

柱に縛り付けられたままのお美代が、相兵衛の出鱈目話を否定するように激しく首を振った。

「嘘じゃ無いぜ・・・ほら、この通り証文まで在る」

懷から何かを書き付けた紙を取り出して、お志津に見せ付けた。

証紙にはお美代の名が記されていた。

「嘘です！妹はそんなふしだらな娘ではありません！」

今にも飛びかかって行きそうな軀を男達から必死に押さえられて、怒気に顔を真っ赤にして否定した。

「知らないのは、案外親兄弟だけかも知れないぜ・・・世間では大黒屋の男漁りのふしだら娘ってえらい評判だぜ！」

怒りに身悶えるお志津の様子を見ながら、愉快そうに口にした。

「この娘はな、男から抱かれるのが大好きな助平娘なんだ！ほら、良く見ろ！こんなぶっとい張り形を咥えながら、ヨガリ汁をダラダラ垂れ流しているぜ！」

股間から溢れ出たモノで大腿を艶々と濡らしている様子を指さして笑い声を上げた。

「そらそら、これをこうすればどうだ？」

相兵衛が下腹から突き出たモノの端を握り、お美代の残り火に再び火を点けるように緩やかに操作を始めた。

男達から調教された敏感な箇所を責め立てられ、姉の目の前にも関わらず身体は勝手に反応を始め、柱に縛り付けられたまま身を仰け反らし、うっうっと声を上げた。

「止めて下さいまし！沼田屋さん！お望みのままの金子はお支払いします！どうか妹を許して下さい！」

と、悲痛な声を上げた。

「俺たちは別に金に困っている訳じゃ無い。この娘も此処に留まって俺達とお人形遊びをしたいって言ってるから一所に遊んで上げてるだけだぜ」と、別の男がうそぶいた。

「俺達には大事な家業が有って忙しくてしょうが無いのに、この娘が駄々をこねるもんだから、仕方無く付き合っているだけなんだぜ・・・いい加減、辟易としてるところだぜ！」

男達が口にする言葉は嘘であることは分かり切っていたが、局面を打開する言葉が出せなくて、お志津も黙りこくってしまった。

「さつきも言った通り、俺達は別に金が欲しい訳じゃ無い。ただし、お前さんも知っての通り、商人と商人同士の約束は絶対だ。誓詞に期日までに金が返せなければ、俺達の慰み者になると書いてある以上、俺達にもどうしようも無い・・・」

相兵衛がお志津の様子を見ながら話を続けた。

「ただし、お前さんが何とかすると言うのなら相談に乗ってやっても良いぜ・・・」

相兵衛の言葉にお志津の顔がパッと明るくなった。

お志津の表情を見つめながら、

「此处では何だから、別の間で話を聞こうじゃないか・・・」

と、言ってお志津を促した。

お志津が通されたのは、廊下続きになった離れの茶室であった。

床間に安い水墨画の掛け軸が掛けられただけの簡素な部屋であった。

畳の上に端正に正座するお志津の前に相兵衛がドカリと腰を降ろした。

男達もゾロゾロと入って来て、お志津と相兵衛を取り囲む様に輪が出来た。

狭い茶室の中は、二人を取り囲む空間を残して足を踏み入れる隙間も無くなった。

緊張で青白い貌を浮かべながらもこちらを気丈に睨み付けるお志津に対峙した相兵衛が落ち着き払って口を開いた。

「さっきも言った通り、^{わし}儂らは別に金に困っている訳じゃ無い。だから金で決着を付けようとは考えていない。」

お志津の表情を何うように覗き込みながら言葉を続けた。

「しかし、^{あきんど}商人と商人の約束は絶対や！妹さんは遊びのつもりで証文を書いたかも知れんが、例えそれがどんな事であれ、証文に書かれていることは、どんな事が在っても実行して貰わなければならない。」

相兵衛の断固とした態度に、^{うろたえ}狼狽ながら話す言葉を探しているお志津に、言葉を継いだ。

「お志津さんが身代わりとなって儂らの慰み者になると言うのなら考えてやっても良い。」

周囲を取り囲む男達を見廻して、「皆はどうや？」と確認した。

黙って成り行きを見守っていた男達も沼田屋の言葉に無言のまま肯いて同意を示した。

沼田屋の突然の言葉にお志津の顔が青くなったり赤くなったりした。

夫を持つ身で他の男の慰み者に成るなど耐えられないことであつた。しかし、妹をあのような悲惨な目に遭わせて置くことも妹思いのお志津としては耐えがたい苦痛であつた。

懊悩するお志津に切迫する様に、「さあ、返答は如何に」と問い詰めた。

夫を想う気持ちと妹を想う気持ちが入り乱れ、まともな思考もままならないまま、沼田屋に迫られ、

「判りました・・・私が妹の身代わりと成ります」

と、ポツリと口にした。

お志津の言葉に満面に喜色を浮かべた沼田屋が、周囲を見廻して、「どうだ？お志津さんがお美代の身代わりと成る事に皆も納得するか？」と確認した。

沼田屋の質問に全員が同意を示した。

自分の発した言葉で、踏ん切りが付いたように、お志津は相兵衛を睨み付けながら、

「自分が身代わりと成れば、妹は絶対に家に帰して貰えますね」と、確認を求めた。

「ああ、儂も商人の端くれや！約束は絶対に守る！ここで起請文を書いても良いぜ・・・」

と、懷から紙を取り出して何やら書き始めた。

「判りました。それで安心しました。それでは早速、妹を此处から出して下さい。」

「逃がしてやるのは問題ないが、お美代の着物は借金の片に差し押さえて、既に売り払ってしまった。此处にはお美代に着せる服が無い。精々身に着けるものを貸してやるとしても儂らの褌ぐらいや！」

沼田屋の言葉に周囲からドッと笑いが上がった。

「この夜の夜中に素っ裸で此处から放り出しても無事に家に帰れるかどうかだ・・・」

相兵衛がイヤらしい目付きでお志津の方を見ながら言った。

「お前さんが、此处で着ている物を全部脱いで妹に着せるなら解決するが・・・」

沼田屋の陰険な思い付きに、お志津の顔がサッと赤く染まった。

この野卑な男達の前に裸身を晒すのは耐えがたい苦痛である。しかし、他に方法が無い。

自分が妹に代わって慰み者に成ると約束した以上、自分は裸となって妹に着物を与えて無事に帰すしか無いと諦めた。

「判りました・・・此处で服を脱ぎますから、必ずそれを着せて妹を帰して上げて下さい。」

日頃見知っている男達に裸身を晒すという羞恥に耐えながらキッパリと口にした。

「良い心がけだ！お前さんの妹を想う気持ちにはホトホト感心するぜ！」と、感動した声を上げた。

「安心しな！お美代にはお前さんの着物を着せて、俺達で護衛して今夜中に大黒屋まで送り届けてやるぜ！」

「それを聞いて安心しました。」

お志津は全てが吹っ切れたような表情で口にした。

そして、ゆっくりと立ち上がると、観念したように帯留めに指を掛けた。

しなやかな指先で帯留めを解くと、シュウシュウと衣擦れの音をさせながら帯を緩め始めた。

豪華な絹の帯が足下に蜷局を巻いて落下した。

続けて、着物を押さえていた帯揚げと紐を解いた。

押さえを失った着物のあわせが開こうとするのに羞恥心と呼び覚まされたお志津は、慌てて両手で前を押さえた。

「何を恥ずかしがっているんだ？早く服を脱いで妹に着せたいのだろう？」

と、取り囲む男達から促され、ハッと我に帰り、今は妹を無事に帰すことが先決で恥ずかしさに捕らわれている場合では無いと自分を励まし、着物の襟に手を掛けた。

新妻らしいシットリとした色合いの小紋が滑るようにお志津の身体から離れていった。

桜色の長襦袢姿を晒すお志津の身に男達の粘っこい視線が注ぎ込まれた。

さあ、それも脱ぐんだーと、言うような男達の視線に意を決したように、長襦袢を脱ぎ捨てた。

後には、赤い裾よけと白い半襦袢を残すのみとなった。

男の劣情をそそるようなお志津の艶めかしい身の線が現れる薄い下着姿に男達の生唾を呑み込む音が響いた。

「さあ！早く襦袢も脱ぐんだ！」

相兵衛が下着姿で立ち尽くすお志津に命令した。

頬を赤く染め、固く閉ざした瞼の間から涙がこぼれ落ちた。

震える手で、上体を覆っていた半襦袢を脱ぎ落とした。

露出した成熟した乳房に、オオッ！と男達の声が上がった。

慌てて両手で胸を隠す、赤い腰巻き一枚を残すだけとなったお志津に猥奇に目が集まった。

「さあ！最後の一枚も脱ぐんだ！」

相兵衛が腰巻きも脱いで全裸を曝すように迫った。

「お願いします！これだけは勘弁して下さい！」

流石に女のもっとも大事な部分を男達の目に晒す羞恥に耐えかねて、涙を浮かべながら哀願した。

お志津の身も世も無げに打ち拉がれた様子に、相兵衛はウーンと唸って、しばし、考えてから、「良いだろう、お美代も、それだけ身に着ければ、例え湯文字を履いて無くても外からは判らないだろうし・・・」と、同意した。

「多少、股の間がスカスカするかも知れないがな・・・」と、傍に居た男がニヤニヤしながら混ぜっ返した。

一人の男が麻縄の束を手にお志津の背後に迫った。

そのまま、縛ろうとするのを、「待って下さい！お志津は逃げも隠れもしません！何も縛らなくても良いじゃありませんか！」と、抗議の叫びを上げた。

「お前さんが、俺達の慰み者になる間に気が動転して、暴れ出したら困るから縛らせて貰うぜ。」と、冷たく言い放った。

豊満な胸を隠していた両手を背後にねじ上げると、合わせた良手首に縄をクルクルと巻き始めた。

お志津も全てを諦めたように、項垂れたまま黙って両手を背中で高手小手に縛められていった。

背中で両腕を縛った縄の残りを前に回して、剥き出しとなった形の良い乳房の上下にも縄を這わせた。

良く熟れた柔らかな乳房の上下を二重三重に縛り上げ、豊満な乳房を強調するように括り上げていった。

しっかりと縄止めを済ませた男が、噴き出た汗を拭いながら出来映えを鑑賞した。

其処には赤い腰巻き一枚で後ろ手に上半身を緊縛された若い女の姿が在った。

雪白の透き通るような素肌が赤い腰巻きに^は染えていた。

いまや、お志津は両胸を隠す自由も奪われて、取り囲む男達から裸身をジロジロと見つめられ羞恥に身体を^{ふる}わらせていた。

男達はまるで地上に舞い降りた天女のようなお志津の裸身を、暫くの間、惚けたように見続けたが、相兵衛の「そろそろ、新居にご案内しようか」と、言う声で我に帰った。

「これは、お美代にあげるぜ・・・」と、男が腰を屈めてお志津の脚から白い足袋を脱がせた。

高手小手に縛り上げられ抵抗を封じられたお志津が、男達から押されるように茶室から外に出された。

清衛門に縄尻を取られて渡り廊下を歩く腰巻き一枚の女の前後に男達がゾロゾロと連なっていた。

お志津が連れ込まれたのは畳敷きの上に太い白木で檻を作った部屋であった。

男達から両脇を固められたお志津は、薄暗い部屋の中にボウッと浮かぶ白い木の檻に不気味な物を感じた。

男達はお志津が悲鳴を上げるのも構わず、乱暴に檻の中に押し込むと、ガチャリと扉に鍵を掛けた。

そして、そのまま無言で立ち去ってしまった。

蝋燭一本が灯されただけの薄暗い部屋の中に設けられた、狭い牢の中で上半身を縛り上げられ身動きも出来ぬまま、項垂れて坐り続けるお志津は、男達は本当に約束を守るのだろうか？妹は本当に無事解放されて私の着物を纏って家に帰ったろうかと、次々と込み上げる不安な気持ちに苛まれていた。

物音一つ聞こえて来ない薄暗がりの中に一人置かれて、恐怖感を伴った渦巻く不吉な思いの中で打ち拉がれ、まんじりともせず過ごしていた。

漠然とした緊張感に^{おのの}戦く内に一刻ほど過ごした頃、男達の笑いさざめく声が聞こえて来た。そして、それは段々とこちらに近づいて来た。

部屋を仕切っていた襖を開けて、男達が姿を現した時、お志津はヒィ！と引き攣った声を上げた。

何とそこには両側から男達に支えられた、意識を失った妹の裸身が在った。

自分と同じように、全裸にされ背中で高手小手に縛り上げられたまま、自分の足で立つことも出来ず、意識を失ったようにグッタリとしたまま両側から男の手に支えられ、引きずられて来たのだった。

檻の中で目を見張り、声も出せずこちらを注視しているお志津の姿に気付かないのか、男達は、「今日もタツプリと油を搾り上げられて、立つことも出来ないぜ！」とか、

「流石の油問屋の娘も、もう売り物の油は一滴も残っていないって様だぜ！」など、狼藉の限りを尽くされ、意識が朦朧とするお美代を見ながら笑い上げた。

「沼田屋さん！これはどう言うことですか！約束が違うじゃありませんか！」と、悲痛な声を上げた。

檻の中から目を血走らせて、叫ぶように声を上げるお志津の様子に気付いた相兵衛は、

「俺達は別に約束を破ってねえぜ。俺達はお美代の身体を結構気に入っているんだ。此奴、若いくせに、結構良いお道具を持っているんだぜ。お前がお美代の身代わりに成れる位、良いお道具を持っていることを確かめられたら、お美代は無事帰してやるぜ！」と、笑い声を上げた。

「それなら、直ぐ此处で確かめて下さい！」

一刻も早く妹を解放して貰いたいと焦るお志津は、悲痛な声を発した。

「まあ、そう慌てるねえ！明日の朝、明るくなったら、最後に残った腰の物を捲り上げて、上付きか下付きか確かめてから、そこの匂いや味や絞め具合なんか、じっくりと確かめてやるぜ！」

と、勝ち誇った様に笑い上げた。

「今日のところは妹とも積もる話が在るだろうから、一緒に牢に入れてやるぜ！」

と、言うも座敷牢の扉を開けて後ろ手に縛られたままのお美代を投げ入れるように閉じ込めると、乱暴に扉を閉めた。

畳の上にグッタリと横たわる妹を心配して、上半身を縛り上げられた不自由な身体で、意識の無い妹の傍に躰り寄った。

世間でも評判の美人姉妹をとうとう掌中に納めた男達は、二人を牢内に閉じ込めたまま、満足そうに笑いさざめきながら去って行った。

「お美代！お美代！」畳の上に俯したまま、意識の無い妹に身を擦り寄せ、必死に叫び続けるお志津の姿が在った。

肌に伝わる温もりと、縄目を掛けられた胸が微かに上下することが分かり、まだ生きていることを確認したお志津はホッとしたように息を吐いた。

姉の身体の柔らかさと暖かい体温が伝わって来て、お美代の意識も次第に戻り始めた。

「あっ・・・お姉ちゃん・・・」

うっすらと開いた目に姉の姿を認めて呟く様に声を発した。

「お美代！」

意識を取り戻した妹に、堪らず声を上げた。

「お姉ちゃん！」

今やハッキリと意識が回復したお美代は叫ぶような声を発した。

そして、その後、何も言葉に出来ず、畳の上に俯したまま、激しく嗚咽を始めた。

哀れな妹を抱き締めてあやして上げたい気持ちが込み上げて来たが、後ろ手に縛られているため、それも叶わず、身体を折って上から身体を擦り寄せた。

「大丈夫よ！貴方を此处から出して上げるわ！沼田屋さんと約束したのよ。私が貴方の身代わりと成って貴方を助けるって・・・」

泣きじゃくる妹を励ますように、身体を擦り付けながら、耳元で囁いた。

姉の言葉にビクッと身体を震わせたお美代は、後手に縛られた身体を無理矢理起こすと、濡れた瞳で姉を直視しながら、「お姉ちゃんはバカよ！バカよ！大馬鹿よ！」と大声で泣き叫んだ。

「あいつらがそんな約束を守るはずが無いわ！お姉ちゃんまで、欺されてしまうなんて！お姉ちゃんは大馬鹿よ！」

と、正座する姉の太腿に上体を載せ、膝の間に顔を埋めて激しく泣きわめくのであった。

お志津崩壊

外から小鳥のさえずりが聞こえて来て夜が明けたことが分かった。

一晩中妹をあやしていたお志津は、まんじりともせず朝を迎えた。

一方男達から騷られ尽くして、体力を消耗していたお美代は、姉に身を預けたまま何時の間にか眠りに即いていた。

その寝顔は、柔らかな姉の膝の上に体を寄せて、肌に伝わってくる優しい温もりにホッとしたかの様に、安らかに見えた。

また男達の笑いさざめく声が近づいて来た。

ガラッと襖が開いて、そこには淫靡な笑みを浮かべた男達が立っていた。

お美代を膝に載せたまま、檻の中からキッと男達を睨み付けた。

男達に混じって昨晚見た狐顔の女も立っていた。

「どう？私はやっぱりこちらの着物の方が似合うかしら？」と、男達に^{しな}料を作って問い掛けた。

「お銀！お前は、やっぱり何を着せても似合わない女だな！」

男達がまるで不釣り合いな着物姿を指さして笑いこけた。

声の方を見て、お志津は愕然とした。

その女が身に纏っていたのは、昨晚自分が脱ぎ捨てた黒い小紋であったのだ！そして、昨晚この女の装いに違和感を覚えた原因が判った。

昨晚着ていたのは妹の振袖に違い無かった。

その事からも、この男達は、自分達をこのまま無事帰すつもりがない事を思い知らされた。

「沼田屋さん！約束は絶対に守って下さいね！」

欺されていたとの思いを吹っ切る様に、牢の中から相兵衛を見据えて叫ぶように言った。

「ああ・・・お前さんが妹と同じように良い身体をしていると分かったら直ぐにお美代は帰してやるぜ！」

口元に淫靡な笑みを浮かべて返答すると、左右の男達に目配せした。

相兵衛の意図を受けた男達が無言で肯くと、座敷牢の前に進み出て入口に掛けられた錠をガチャガチャと外し始めた。

扉を開けて二人の男が牢内に入って来た。

それは、お志津も良く知っている呉服屋と小間物屋の主人であったが、日頃の温厚で商人らしい腰の低さは微塵も無く、飢えた狼のように、淫靡な期待に目を異様に光らせて近づいてくる二人に背筋が凍るような恐怖を感じた。

男勝りと人から言われる気丈なお志津であったが、無言のまま近づいて来る男達の全身から発するただならぬ気配に怯え、堪えようにも身体がブルブルと慄^{ふる}えた。

左右に立った男達は、高手小手に縛り上げられ、身動きの出来ないお志津の肩をガッシリと掴んだ。

「イヤー！触らないで！」

恐怖に耐えきれず、悲痛な叫びが上がった。

男達は無言のまま、戦慄する女の身悶えを楽しむ様に、左右から上腕を掴むと、お美代を膝の上に載せたまま正座するお志津を無理矢理立ち上がらせようとした。

「イヤー！お姉ちゃん！」

自分から引き離されて、連れ去られようとする姉に気付いて、高手小手に縛り上げられた不自由な身体をくねらせて、取り縋ろうとした。

「うるせー！お前は、ここで大人しく寝てれば良いんだ！」

と、声を上げると、足下に纏わり付くお美代を乱暴に蹴り上げた。

二人の男から左右から抱きかかえられる様に牢から連れ出される姉の様子を涙に霞む目で追いつけた。

呉服屋と小間物屋により左右から抱えられて檻から連れ出された、透き通るように白い肌に赤い腰巻き一枚身に着けただけの、熟れた果実のような豊かで形の良い乳房を誇張する様に上下から麻縄で縛り上げられた、お志津の姿を男達は好奇な目で見つめた。

「お志津！お前、湯文字の前がグッショリじゃないか！」

一人の男がお志津の股間に当たる部分がビッショリと濡れているのに気付いて、指差して、笑い声を上げた。

「お前、朝になったら俺達に下の検査をして貰えると思って、嬉しくなって、一晩中股の間に濡らしていたんだろ？」

とか、

「全く姉妹揃ってスケベな女達だぜ！」

とか、思い思いに囁し立てた。

それは、昨晚妹が顔を埋めて泣きはらした涙の跡であったが、男達はそれと知らず、盛んに揶揄し合った。

「其処の格子に縛り付けろ」

相兵衛がお美代の入った檻を指差して命じた。

男達はお志津の軀を牢の格子に押し付け、高手小手に縛り上げた縄尻を格子に結び付けて固定した。

格子を背にして立位で縛り上げられたお志津は身動きを封じられてしまった。

檻の中から上体を縛り上げられ軀を自由に動かせないお美代が心配そうに見つめていた。

格子を背に身動きを封じられたお志津は潤んだ眼で相兵衛を見つめながら、

「沼田屋さん！約束は絶対に、絶対に守って下さいね！」

と、涙声で哀願する様に叫んだ。

そんな、お志津の必死な願いに、

「ああ、分かっているよ。」

と、ぶっきらぼうに答えた。

「へへ・・・こんなに濡らしていたら気持ち悪いだろう？今脱がして上げるからね・・・」

満面に喜色を浮かべた染物屋の主人がイヤらしく両手を伸ばして来た。

お志津の赤い腰巻きに、染料で染まったどす黒い指を匍わすと、固く腰の周りを覆っていた布地を緩め始めた。

お志津の身体を最後まで守っていた艶めかしい布の盾が張りを失い、滑らかな肌から離れ始めていった。

「さあ！どうだ！」

赤い布を両手に力一杯握り絞めると、サッとお志津の腰から奪い取った。

その瞬間お志津の口から悲鳴が上がり、取り囲む男達から歓声が上がった。

成熟した女性らしく、柔らかな肉を置いた下腹が野卑な男達の目の前に露わとなり、羞恥に身を揉んで両腿を固く閉じ合わせた。

これが世間でも名を売った小町娘の裸姿か！と、取り囲む男達は目を血走らせて全裸のお志津を凝視した。

男達から卑猥な視線を浴びせられて、顔を真っ赤に染め、身も世も無く身体を縮め、股間を固く閉ざしたまま、羞恥と恐怖に身体をガタガタと震わせていた。

しかし、いくら股間を閉めても雪のように白い大腿の間からは艶を帯びた黒い繁茂が隠しようにも無く露出していた。

夢の様に頼り無く下腹にたなびく黒い霞の様な媚めかしい叢を男達は血走った目で見続けた。

そんな、お志津に下卑た熱い視線を送る男達を、お銀は鼻白んだ貌で眺めていた。

生娘で捉えてきたお美代と違って、二年ほどとは言え、男の精を体内に受け入れて来たお志津の肉体は全体に柔らかく肉を置き、幼さの残るどこか華奢なお美代よりは、乳房も大きく発達し、腰の周りも丸みを帯びて豊かに張っていると感じた。

大きく垂れた乳房の先端の乳首もお美代の桜桃のような薄い桜色をした小さく可憐な乳首と比べると少し色素を帯びた野苺の様に大きく感じられた。

そんな、お志津の身体の一つ一つの探訪に満足し、お美代の裸身との比較を終えると、男達は次なる期待に胸をときめかした。

「それじゃ、昨日言ったように、股をガバッと開いて貰って、上付きか下付か？匂いや味はどうか？絞め具合はどうか？なんて調べさせて貰おうか・・・」

相兵衛が掠れた声で呟くように口を開いた。

相兵衛の言葉に二人の男が縄を手にお志津の足下に腰を屈めた。

男達の意図を察したお志津は、「イヤ、イヤ」と、咽ぶような声を上げて、激しく首を振り立てた。

お志津の怯えた態度にも気にせずに、男達は両足首に縄を結わえ終え、それを左右に力一杯引き始めた。

両脚を引き裂こうとする男の力を感じて本能的に太股に力を込めてそれに抵抗しようとした。

「ほら！何頑張っているんだよ！さっさと開くんだ！」

と、お志津の必死の^{あらが}抗いを楽しむ様に更に縄を引く手に力を入れた。

両腿に有りっ丈の力を込めて男の腕力に歯向かうお志津であったが、所詮女の体力では男二人の力に抗し切れず、固く閉ざされていた大腿がジワジワと開き始めた。

唾棄すべき男達の目の前に女の秘められた場所を無理矢理こじ開けられていく状況に、顔を真っ赤に染めてアッアッと呻くような声を上げた。

「何が、アッアッだ！サッサと押っ^お広げれば良いんだよ！」

左右から縄を引っ張る男達が笑いながら声を上げた。

とうとうお志津の両脚は扇の様に左右に大きく押し広げられ、もっとも隠しておきたい両腿の間は、あから様にさらけ出された。

男達は牢の格子に足首を縛った縄を手早く結び付けた。

お志津は今や牢を背に身動きも出来ず、人の字型に縛り上げられていた。

牢の中からお美代が姉の惨めな姿を涙を浮かべた目で見つめていた。

「へへ、散々^{てこず}梃子搦らせやがってよ・・・漸く^{ようや}弁天様のご開帳だぜ！」

男達がこれ以上無いほど開放されたお志津の股間に、まるで鼻先を押し付ける様に顔を近づけ、その内部の様子を鑑賞した。

「へへ・・・臓物まで丸見えだぜ！」

股間を下から覗き込み、春草の隙間から姿を現す鮭肉色した花卉を指差して歓声を発した。

「何て柔らかいおケケだ！指に吸い付くようだぜ！」

指先で艶めいたしなやかな恥毛を撫で擦りながら感激した声を上げた。

「それじゃ、お志津！約束通り、これからお前が上付きか下付か、匂いや味や、絞め具合はどうか、調べさせて貰うぜ！」

相兵衛が宣告するように言った。

「お銀！お前がやれ！」

少し離れた所で男達の痴態を呆れたように眺めていたお銀の方に振り向いて命令した。

「へえ、私がかい？」

沼田屋の命令ではあるが、満更でも無い顔つきでこちらに近づいて来た。

「前には妹さんの身体を調べさせて貰ったけど、まさか、その姉さんまで調べることになるとは、想ってもみなかったよ・・・」

お美代に対して一編の同情心も感じなかったように、お志津に対しても憐憫の情を抱くことは無かった。むしろ、これまで貧困と苦難の中で生きて来た自分の人生を振り返り、裕福に何の苦労も無く育って来た女と比べると、ムラムラと敵愾心が込み上げてくるのだった。

お志津の股間の前に群がる男達を押し退けると、どっかりと胡座をかいて座り込んだ。

お志津は自分の目の前に胡座坐りする、自分の着物を着込んだ狐顔の女に不気味な物を感じた。

その女は敵意を込めた目でこちらを睨み上げていた。

お銀がそろそろと指を伸ばしてきて、しっとり肉付きの良い雪白の太腿に触れた。

その気味の悪い女の指先を内側の太腿に感じてお志津は、ヒィと小さく悲鳴を上げて身体を慄わせた。

お志津の拒絶の反応も無視して、その内腿の柔らかな感触を確かめながらジワジワと指先は両腿の付け根に向かった。

指にシットリと絡みつくような、まるで乳を練って作ったような柔らかな肌だと、乳白色の肌理細かい滑らかな肌を擦りながら思った。

それは自分の血色の悪いガサついた肌と大違いだと認めざるを得なかった。

人の目からは自分の方がこの女より随分と年上に見えるだろうが、実際にはこの女の方が年上なのでは無いだろうかと感じた。

それもこれも生まれ育った環境の差だと思うと、世の中の不公平さに腹立たしいものを感じた。

そして、裕福な人間への僻^{ひが}みが陰湿な恨みとなってお銀の心を占領していくのであった。

「どうだ？お銀、ソコの様子は？」

相兵衛がお志津の秘められた女の花園に指先を匍わせ始めたのを注視しながら問い掛けた。

「ええ、血筋は争えないって言うか、この姉の方も妹と同じように良い道具を持っていそうですね・・・」

お銀の指先をその部分に受けて、その妖しげな感触に小さく悲鳴を上げながら、身体を慄

わせるお志津の姿が在った。

自分の指技を受けて敏感に反応を繰り返すお志津に満足したように、「アンタは毎晩の様に亭主に抱かれているだろうから、こちらの方で楽しむコツは良く知っているはずだよね・・・」と、ズルリと開き始めた肉口に指先を沈めた。

突然、その部分に不気味な女の指先を突き立てられ、ウッ！呻き声を上げて身体を硬直させた。

「随分と気味悪そうに身体を固くしているじゃ無いか・・・もっと力を抜いたらどうだい？」指を挿入されたまま嫌悪の表情を浮かべて、拒絶するように腰を動かすお志津に、敵意のようなものを感じたお銀は、もっとこの女を虐めてみたくなった。

「ほら、ほら、ここをこうすればどうだい？感じるだろう？」

拒絶の態度を示す女の秘奥を内部から意地悪く攻撃しながら、笑みを浮かべるのだった。

それは、長年性行為に長けてきたお銀ならではの巧みな指使いであった。

自分自身も知らなかった秘められた性感を内部から責め立てられ、これまで経験したことのない刺激が次々と襲い掛かり、お志津は全身を真っ赤に染めて荒い息を吐き出した。

最初の頃の頑なに拒み続ける姿勢も姿を潜め、今やお銀の指先で操られるように、舌足らずの悲鳴を上げて、悶えるお志津の姿に、男達はホッと声を上げて見守った。

「ほらほら、大分感じてきたようじゃないか・・・それじゃ私の指を絞めてごらん。」

自分の技に掛かれれば、オボコ娘も若妻も関係ないと余裕を持ったお銀はユルユルと内部から搔き立てながら命じた。

「ほらほら、絞めてごらんよ・・・」

と、指を深々と咥え込んだその部分を見つめながら、ニンマリと笑みを浮かべた。

「どうだ？お銀、中の具合は？」

相兵衛が顔を寄せて尋ねて来た。

「まあ、まあ、悪くは無いようですね、鍛えように困っちゃ、そこそこ物に成るんじゃないでしょうかね・・・」

と言うと、お志津の秘裂に埋めていた指を抜き取った。

指先による狼藉が終わり、ほっとした表情を浮かべるお志津を淫猥な目で見つめながら、ニヤリと口の端を歪ませた。

「指だけじゃ、奥の方まで分からないから、次はこれを使って確かめてみようかね・・・」

と、淫靡な笑みを浮かべて袂から木で作られた不気味な形状をした筒具を取り出した。

そして、それを牢を背に人の字型に縛り付けられ身動き出来ないお志津に見せ付ける様に示した。

「これはね、お前の妹が‘お人形遊び’の時に何時も使っている、お気に入りのオモチャさ・・・どうだい？長くて太くて実にイヤらしい形をしているだろう？」

相手の反応を窺うように、トネリコの木を削って作られた黄白色の禍々しい物を意地悪く目の前に持って来て見せ付けた。

すぐ直前に見せ付けられ、驚いた顔で、目を見開いてそれを凝視したが、その筒具の意味が分かり、頬を赤く責めて顔を反らせた。

そのお志津の若妻らしい初心^{はつこ}な様子に取り囲む男達から笑い声が起った。

「お前の妹はね、顔に似合わずおませな娘でね、この太いのをアソコに填めて貰って、中を掻き回して貰うのが大好きなんだよ・・・こんな太くて長いのを奥まで呑み込んで、もっともっと一て、鼻を鳴らすんだよ！」

と、その先端でお志津の頬をぺたぺたと叩きながら、笑い声を上げた。

牢の中でお美代が、違います！違います！と大声で叫び続けていた。

「違うもんかね。ほら！この先の部分が黒く変色しているだろう？これは妹の身体から沁み出したお露が染み込んで黒くなっているんだよ・・・」

と、固く閉じたお志津の目をこじ開け、変色した亀頭部分を見せつけた。

実際には、その変色の原因の大部分は、長年に渡ってお銀が男達から責められている間に濃くなったものであったが、お美代の羞恥心を掻き立てる様に、嘘を並べ立てているのだった。

「この張り形には、お前の妹のお汁が一杯染み込んでいるんだよ！懐かしい妹の匂いを嗅いでみたいだろう？」

と、先端をお志津の鼻に擦り付けた。

「アアーッ！止めて下さい！」

姉に対する、お銀の陰険な行為に、牢の中からお美代が泣き叫んだ。

「さて、その前に準備しておかないとね・・・いきなり太いのをぶっ刺して、腹がキツくなって、はずみに私の顔にシャーなんてやられたらしょうが無いからね。」

と口にして、後ろを振り向くと、「おい！その桶を持って来ておくれ！」と、背後に立つ男

に命令した。

此处では、男達が絶対の権力者であり、お銀は男達から虐げられるだけの立場であったが、お銀が囚われの女の責めに参加するようになってから、何時の間にか主客逆転したような態度になっていたが、誰も気に留めず、男は言われた通り桶を手に戻って来た。

「これは何だと思う？」

木桶を手にとると、お志津に見せ付ける様に、顔の前に持っていった。

「これはね、お前の妹の肥桶さ！お前の妹は何時も器用にこの中に糞や小便を垂れているんだよ。ここの女はね、糞や尿はこの中にする事になっているのさ！」

「ああー、イヤ、イヤ、」

お銀の口から隠しておきたい恥ずかしい事実を次々と姉に知らされて、檻の中のお美代が激しく首を振りながら泣き叫んだ。

「さあ！早くこの中に小便をするんだよ！」

と、木桶をお志津の下腹にグイグイと押し付け勝ち誇った様に笑い声を上げた。

お銀が指摘するように、一晩中腰巻き一枚で放置されたお志津の下腹は、込み上げる尿意で張り詰めていたが、満座の男達の目の前で排泄する羞恥は耐えがたいものだった。

「妹が使っている肥桶を姉も使うなんて傑作じゃ無いか！」

お銀は羞恥に泣き伏す姉妹の様子を見比べながら笑い声を発した。

「お前の妹はね、立ったまま大股開いて、男達に向かってニッコリと微笑んだまま、堂々と立ち小便するんだよ！姉のお前が出来ない訳無いだろう！」

と、尿意を刺激するようにグイグイと押し衝けながら口にした。

「妹も大分溜まっているはずさ！お前の後にこれを使わせなければならないから、早く済ませておしまい！後が聞えているんだよ！」

何時までも拒絶の態度を示すお志津に癪癪を起こしたように怒鳴りつけた。

下腹に度重なる圧迫を受けて、体内から苦痛が込み上げていたが、嗜虐者の目の前での排泄行為は耐えがたい屈辱であった。

進退窮まった状態のお志津であったが、陰湿な眼差しを向ける男達の目の前で醜態を曝す羞恥に耐えかねて、涙をこぼしながら「イヤイヤ」と、首を振り続けた。

「そうかい？イヤかい？私^{あたし}ねえ、イヤだと言われるとどうしてもやらせてみたくなる性分
でねえ・・・」

と、意地悪く口の端を歪めると、開股縛りにされたお志津の下腹に手を伸ばし、太腿の間に密生し、秘園を覆っていた叢を掻き上げ、その奥に秘められた艶めかしい秘裂を丸出しにした。

女の秘め所を取り囲む男達の目に無理矢理さらけ出されてしまった恥ずかしさに呻くような声を上げた。

「思った通り、上付きの見事な割れ口じゃないか！」

見つめる男達から嘆息の声が上がった。

男達の上擦った声に満足したように、更にお銀は、剥き出しとなった亀裂に指を添えると、両手で女の花園を大きく左右に押し広げた。

下卑た視線を浴びせ続ける男達の目に、秘められた部分が、あから様にさらけ出されて悲鳴を上げた。

「ほほ・・・亭主と何時もまぐわっているくせに、綺麗な色をしているじゃないか！」

と、押し広げた艶々とした鮮やかな肉の色を見せる秘園を見つめて大きな声を上げた。

そして、開け広げられた肉の狭間に顔を寄せると、その部分から起ち昇る女の香りを嗅ぐような仕草をして、「良い匂いがするじゃ無いか！」と大きな声を上げた。

そして、そのまま更に顔を寄せると、舌先をスルリと伸ばして、剥き出しのその部分に舌を這わせた。

お銀の気色の悪い舌先を女の祠に感じて、お志津はウッと喉を詰まらせた。

「ほほ・・・少し塩味だね、それに私の指で感じて流れ出た甘い蜜の味がするよ。亭主がお前の身体に夢中になるのが想像出来るね・・・」と、淫靡に頬を歪めた。

「旦那！この女の此处が良く見えるように大きく広げたままにして置いて下さいな！」

お銀に言われて、二人の男が人の字型に縛り上げられたお志津の両側に立ち、左右から濃密な春草を掻き分け、肉褰に指を掛けると、精一杯押し広げた。

二人の男の手により剥き上げられた陰部に再びお銀の指先が伸びた。

尿意を必死に堪えようと下腹に力を込めるお志津を嘲笑うように、お銀の指先の狼藉は続いた。

「ほほ・・・可愛いオサネだね・・・」

秘園の上端にひっそりと姿を見せる華奢な肉茎を指差して笑った。

そして、指先で優しくその包皮を剥き上げ、薄紅色の果実を根元まで露出させた。

下賤な女の指先で秘められた大切な部分を玩ばれ、身体を仰け反らせて屈辱に耐えた。
そんなお志津の反応に気を良くしたように、股間に顔を埋め、いきなり唇をそれに押し当てると、舌先でその肉の実を転がした。
込み上げる尿意を堪えながらも、その部分からジンジンするような刺激を受け続け、お志津の腰回りが抑えも効かずブルブル震えた。
口唇を使ってお志津の情感を煽り続けながらも、お銀の指先は巧みに秘園を這い回っていた。
お銀の指先は再び女の肉口を捉え、優しく揉みたてながらも、その僅か上に位置する孔に指先を押し当てた。
そして、お志津の尿意を促進するように指の腹でユルユルと揉み上げた。
陰核を舌先で攻められ、尿道孔を指先でいたぶられ、半開きに開いたお志津の口からは絶え間なく悲痛な呻きが洩れていた。

「どうだい？シャーとするかい？」

お志津の前にドカッと腰を降ろしたお銀が指先で悪さを続けながら、苦悶の表情を浮かべるお志津を見上げながら聞いた。

尿意は既に限界を超えている感じで、体内から込み上げる耐えがたい苦痛に苛まれていたが、満座の男達の目の前で恥を晒すのは耐え難く、激しく首を振り続けた。

「そうかい？妹ならとっくに派手に撒き散らしているところだけど、流石にお姉さんは我慢強いね・・・」

お志津の頑なな拒絶の態度に半ば呆れたように「仕方無いね・・・」と、呟くと、

「旦那！その塗り箸を取って下さいな！」

と、最前まで酒のつまみを食するために使っていた、膳の上の塗り箸を取るように頼んだ。

「あんたもバカな女だね・・・こんな事までしたく無かったんだけどね・・・」

と、呟きながら、受け取った塗り箸の丸い先端部を尿道孔に押し当てた。

そして、それを中心部に押し付けたまま、弧を描くようにグルグルと回し動かした。

堅い木の箸が柔らかな肉を押し拡げ、内部に埋没して行った。

「アアー！痛い！」

細い肉の孔を内部から無理矢理押し拡げる激痛に、お志津の口から悲鳴が上がった。

「どうだい？こう言うのも案外気持ちが良いもんだろう？・・・小ぶりの張り形を使って

この後、ここを開発してやろうかね・・・」

お志津の股間に細い木の棒を埋め込みながら、呟く様に言うと口の端に淫靡な笑みを浮かべた。

「ああー、お姉ちゃん！」

檻の中からお美代が姉の苦痛に悶える姿を見つめながら悲痛な声を上げた。

「アアッ！オシッコをします！もう止めて下さい！」

苦痛に耐えきれず、叫ぶように口にした。

その、悲痛な叫びに、意地の悪い笑みを浮かべたお銀は、

「こっちはお前のために、親切に、これだけ用意をしてやってんだよ！‘オシッコをします’は、無いだろう？‘お願いします。お志津にオシッコをさせて下さい‘だろう？」

と、断末魔の苦痛に歪むお志津の顔を見ながら言った。

「お願いです！お志津にオシッコをさせて下さい！」

体内から襲い掛かる激痛に耐えきれず、叫ぶように声を上げた。

気位の高い大店の若女房を遂に屈服させたという優越感に満たされたお銀は、

「私は良いけど、此処に居る旦那方はどうかね？一人一人お願いして見なよ。」

と、更に意地悪く命じた。

切迫する衝動に恥も外聞もかなぐり捨てたお志津は、

「沼田屋さん！お願いです！お志津にオシッコをさせて下さい！」

悲鳴の様に叫んだ。

体内から込み上げる圧力に苦悶するように、尿道孔に差し込まれた箸がピクピクと蠢いていた。

商売敵の店の娘をここまで落とし込んだという勝利の快感に酔いしれ、「良いだろう」と、短く応えて首を縦に振った。

「高麗屋さん！お願いです！お志津にオシッコをさせて下さい！」

小間物を扱う高麗屋の主人も、若い美女の身悶える姿に愉悦感を刺激され、首を縦に振った。

こうして、「鈴野屋さん、お願いしますー」とか「阿漕屋さん、お願いしますー」とか、一軒一軒、屈辱の哀願を続けさせられた。

8人ほどの許可を得た頃には、お志津の意識は完全に惑乱し、まともな精神状態を維持することは出来なくなっていた。

それでも、薄れ行く意識の中で最後の店の主人にまで許可を取り付けた。

「良く頑張ったね！それじゃやらせて上げるよ！」

と、口にすると木桶をピッタリと股間に押し付け、出口を扼していた塗り箸をサッと引き抜いた。

その瞬間まるで鉄砲水のようにその小さな孔から噴き出した。

両側から男達により陰唇を捲り上げられ、これ以上無いほど開ききった秘園の奥からは、その放水の状況がありありと映った。

猛烈な放水の勢いは、お銀が捧げ持つ桶の底を激しく叩き、飛沫を上げてお志津の大腿を濡らした。

その激しい噴出ぶりに取り巻く男達からドッと笑い声が上がった。

檻の中ではお美代が身体をくねらせて鳴き声を上げた。

大量の小水を排出し、内部から責め立てていた圧力が減少していくのを感じながらお志津の意識は次第に遠退いて行った。

「全く、何て女だろうね？小便垂らしながら眠りこけちゃうなんてさ！」

お銀が意識の無いお志津の頬をピシャピシャ叩きながら声を掛けた。

激烈な苦痛から解放され、しばし、幸福な時間にひたったお志津はお銀により無理矢理覚醒させられた。

ふと目を覚ますと、目の前には悪鬼のような女と男達の顔が在った。

「全く、何て女だろうね！派手に小便撒き散らして、私の手までビショビショじゃないか！」

お銀が飛沫で濡れた桶を持っていた手をお志津の目の前に突き出した。

見栄も羞恥も忘れ去り、ボーッとした表情を浮かべるお志津は、黙って唇を開き、舌を伸ばして、濡れた手を拭い始めた。

その素直なお志津の態度に気を良くしたお銀はニンマリと笑みを浮かべると、

「全く、大家の若奥様が聞いて呆れるよ！こんなに派手に小便をぶち撒けてさ！家でも厠をビショビショにしているんじゃないのかい？」

と、お志津の舌で排泄液に濡れた手を拭わせながら、大声で笑い立てた。

「さて、次はこれで奥の方まで調べさせて貰おうかね・・・」

お銀がトネリコの木で作った淫具を手にして、迫った。

「お願いします、少し休ませて下さい・・・」

牢の格子に立位で縛り付けられたまま、グッタリと憔悴した表情を浮かべるお志津が小さな声で哀願した。

「何言ってるんだい！お前は、朝の下の物を済ませただけだろう？これから、この木の道具を使ってお前の持ち物を確かめたり、旦那方の肉の棒を使って確かめたり、色々忙しいんだよ！休んでいる暇などあるもんかい！」

と、冷たく言い放つと、人の字型に縛り上げられ大きく開いた股の間に筒具の先端を押し付けた。

「あれだけ恥を晒して、心も体も軽くなったようだね・・・この太い張り形をグイグイ呑み込んで行くじゃないか・・・」

充血した秘所の肉が柔らかく開き、抵抗無く禍々しい形状の淫具を呑み込んで行く状況を目を細めて眺め続けた。

「ほらほら、とうとう奥まで呑み込んでしまったよ！」

筒具の先端が肉の壁に当たるのを感じて、手を止めた。

「お前の妹は最初の頃はここまで呑み込むのに随分苦労したものだけど、余程亭主に鍛えられているんだろうね！毎晩の様にやり狂っているんじゃないかい？」

と、お志津の表情を伺いながらからかいの言葉を投げ付けた。

そんなお銀の揶揄も意識出来ないほど、お志津は、顔を真っ赤に染めて、体内に埋め込まれた巨大な淫具の異物感と対峙していた。

「こんなに腰をモジモジさせてさ！こうして欲しいんだろ？」

と、笑うと深々と突き立てた責め具をユルユルと操作し始めた。

お銀の巧みな操作により肉洞内に痛痒感が搔き立てられ、自然とアッアッと呻き声が上がり、腰を震えさせた。

「どうだい？気持ち良いだろう？お前は元々こんな遊びが好きな助平女なのさ・・・」

繰り出す張り形の動きに敏感に反応を示す、お志津の下腹を観察しながら頼もしそうに声を上げた。

「ああー、違います！違います！」

込み上げる痛痒感と戦い、顔を真っ赤に染めて、苦しげに眉根を寄せながら、必死にお銀の言葉を否定した。

「違うもんかね・・・ほら、この奥から物欲しそうに涎が流れ出ているよ・・・」

と、筒具を濡らし始めた愛液を見つめながら言った。

取り囲む男達も女体から溢れ出る、その濃厚で豊富な樹液を見つめながら感嘆したような声を漏らした。

お志津の反応に気を良くしたお銀は、

「旦那、この姉の方も妹に劣らない位、良い物を持っているようですよ！」

と、張り形責めに鋭敏に反応するお志津の様子を眺めて嬉しそうに叫んだ。

男達もお銀の言葉に興味深そうに、身悶えるお志津の様子を見つめた。

「旦那、次は旦那達の生身の肉棒でこの女の中を掻き回したいんでしょ？」

筒具の操作を速め、崩壊まで間際に追い上げながら、相兵衛の方を見て尋ねた。

気もそぞろになっていた男達は、お美代の処女を奪う時に使った、手足を固定するための棒杭を打ち込んだ戸板を運び込み、その上に布団を敷いた。

そんな男達の慌ただしい動きも、意識出来ないほど、お銀に激しく攻めたてられるお志津は全身にしっとりと汗を浮かべ、軀をブルブルと震わせ、股間から込み上げる切ない疼きに言葉にならない呻き声を洩らしていた。

突然、絶叫するような奇声を発して、全身を緊張させると、次の瞬間ガックリと力を失って頭を項垂れさせた。

凄まじかった崩壊の余韻を残すように、淫門に挿入されたままの淫具をピクピクと喰い絞めるのが、筒具を握り絞めるお銀の手に伝わった。

「へへ・・・とうとうお銀の手でも登り詰めやがったぜ！それじゃ次は俺達で味見させて貰おうか・・・」

男達はグッタリと意識の薄いお志津の身体に近寄ると、牢に繋ぎ止めていた縄を解き始めた。

次に、この陰虐な男達により姉の貞操は蹂躪されるんだと思ったお美代は涙を浮かべてその様子を窺った。

男達は三人掛かりでお志津の上背と両脚を持ち上げると、荒い鼻息を吐きながら戸板の上に運び込んだ。

男達に運ばれながら、うっすらと開いた目で、淫欲に狂った男達を見つめていた。

男達は、戸板の上に敷かれた布団の上にお志津の身体を仰向けに横たえ、両足首を掴

んで、戸板の両端に打ち付けた棒杭の所まで持って行った。

そして、新たに麻縄を足首に結び付けると、セカセカと縄の端を棒杭に縛り付けた。

お銀の手管により、絶頂を極めさせられたお志津の意識はいまだはっきりせず、軀は痺れきったままで、無抵抗のまま男達に戸板の上に固定されていった。

男達は出来映えを観察するように、戸板の上に横たわるお志津の姿を繁々と眺めた。

雪白のきめ細かな裸身が、薄汚れた布団の上に横たわり、扇の様に開いた男心をそそるような柔らかな肉を置いた太股の間には、艶めかしい漆黒の茂みが、これまでの狼藉の跡を示すように、露に濡れて光り、微かにそよいでいるように見えた。

堪らなくなつたように、沼田屋が着ている物を慌ただしく脱ぎだした。

長い睫毛がそよぐ泣きはらした臉を薄く開いて、涙に潤んだ黒い瞳で、じっと見つめるお志津の方に、快楽への劣情に燃え上がった相兵衛が股間から醜い男の肉塊を押し立て歩み寄って来た。

この屋敷に連れ込まれ、既に長時間の狼藉を受け続け、お志津の意識は、もはや正常な状態を維持出来ず、まるで霞がかかったようにボーとしており、ともすれば意識が途切れそうになっていたが、妹を誘拐し強姦した主犯が醜怪な男の肉塊を隆々と押し立てこちらに近づいて来る様子を霞む目で見て、背筋を悪寒が襲うと共にどうしようも無い諦めの気持ち込み上げて来た。

「沼田屋さん、約束は必ず守って下さいね・・・」

無駄な哀願とは思いつつも、半ば絶望的な気持ちで、身体を重ねて来る相兵衛に呟く様に言った。

「うるせーな！分かっているよ！」

と、お志津の股間に怒張を押し当て、お志津の裸体の上に身体を預けながらぶっきらぼうに返事をした。

あっ、と短く声が上がり、お志津が身体をくねらせた。

陰口を割って、隆起した沼田屋のモノが侵入を始めたのだった。

相兵衛に串刺しにされながら、「お美代・・・お美代・・・」と、自分のことでは無く、妹のことを心配するように小さく呟き続けていた。

相兵衛は、暖かく湿ったお志津の柔らかな肉洞に硬化したモノを挿入、その極上な内部の感触を味わいながら、遂に商売敵の店の美人姉妹を二人とも手込めにしたという勝利の感

激に痺れる様に酔いしれ、込み上げる情欲に命じられるままに、腰を使い出した。

相兵衛はお志津の極上の肉洞内に己の醜いモノを突き立てながら、お志津の亭主の嘉兵衛という海産物問屋の若主人の顔を思い浮かべていた。

嘉兵衛に対して、別に恨みが在る訳では無いが、あの人の良さそうな実直そのものの男の若妻を今思いのままに犯しているのだと思うと、言い知れぬ愉悦感が込み上げてくるのであった。

相兵衛に組み敷かれ、蹂躪されるお志津は辛そうに眉根を寄せて固く目を閉ざして、卑劣な商売敵の男のモノを喰い絞めていた。

「お美代・・・お美代・・・」と呟く、お志津の固く閉ざした瞼の間から涙が一つ流れ落ちた。眼下で喘ぐように薄く開いた赤い椿を連想させる肉厚の唇に口付けしたくなり、唇を寄せたが、例え下の口の貞操は奪われても上の口の貞節は護ろうかとするように、イヤイヤと小さく口走って顔を逸らし、相兵衛の唇から逃れようとした。

お志津の拒絶の態度に腹を立てたが、力尽くで奪うのも面白みが無いと思った相兵衛は、「どうした？妹の身代わりに成りたいんだろう？」と、意地悪く囁きかけた。

相兵衛の言葉にハッとしたように動きを止めたお志津に唇を重ねていった。

舌先で固く閉じた唇を押し分け、相手の口腔内に舌を差し入れた。

相兵衛の相手の舌を掬い取り搦めようとする動きに、大人しく舌を与え、互いに舌を絡め合った。

深々とお志津の女陰を貫きながら、熱い口吻を繰り返す相兵衛の様子を取り囲む男達が生唾を飲み込んで見守った。

あっ・・・と、小さく呻いて赤く火照った身体をくねらせた。

女慣れした相兵衛の技巧が、夫を持ち、閨を重ねる間に開発されて来た女性の快感のツボを捉えたことが意識された。

もうこうなれば、こっちのもんだーと、ニヤリと淫靡な笑みを浮かべた、

これまで交わってきた女達を通じて、培って来た性技には自信を持っていた。

自分に罹れば、町娘でも例え尼寺の尼僧でもイカすことが出来ると自信を持っていた。

今は、漸く手に入れたこの美人の人妻に自分の持てる限りの性技で責め立て、完膚無きまでに屈服させたいーと、暗い欲望が疼き出していた。

「そら、そら、ココをこうすればどうだ？」

お志津の股間に分身を埋めたまま、剥き出しの乳房をヤワヤワと揉み上げたり、尖った牝
芯を暴き出して、屹立したその先端を指先で撫で回したりして反応を窺った。

いまやお志津は相兵衛の巧みな攻撃の前に我を忘れて燃え上がってしまい、相兵衛が淫手
を繰り出す度に、辛そうに眉を歪めてアエギ声を上げ、熱く熱を帯びた身体をくねらせる
のであった。

相兵衛が突き立てたモノを洗うお志津の豊富な愛液にホウと声を上げた。

そして、その暖かな花蜜を溢れさせる泉に自分の分身を埋めたまま桃源郷に誘われるよう
に感じていた。

突然、お志津が、ウッ！と短く声を発すると、全身を硬化させた。

お志津が自分の手管の前に絶頂に達した事を知り、甘美な勝利の快美感が全身に込み上げ
た。

その、この上ない歓喜を解き放つように、お志津の体内に熱いほとぼしりを注ぎ込んだ。

長年商売では敵わなかった相手の店の美人姉妹に報復を遂げたと、勝利の美酒に酔いなが
ら、いまだに絶頂の余韻を残すお志津の裸身を観察した。

「それじゃ、そちらの旦那と交代しようか・・・」

相兵衛としては、何時までもお志津を抱いていたかったが、後が問えていることを意識し
て、いまだに目を閉ざして、荒い息を吐くお志津の可憐な唇に軽く唇を合わせると、身体
を退かせた。

首領格の相兵衛以下の順番は^{あらかじめ}予め、籤引きで順番を決めてあったのだろう。

二番目を引き当てた相模屋の主人が、昂奮で顔を赤くして、着物を脱ぐのももどかしく仰
臥するお志津の傍に歩み寄った。

相兵衛との熱い性行に煽り立てられ、込み上げる獣欲に息を荒くした男が、淫靡な炎を目
に輝かせてお志津に挑みかかって来た。

「お願い、相模屋さん、少し休ませて・・・」

長時間お銀から責め立てられ、今また沼田屋から狼藉され、全身が鉛のように重く疲労困
憊したお志津が、目に涙を浮かべ、か細い声で哀願した。

「何言ってやがんだ！お前の淫らな姿を見せ付けられて儂のは、この通りだ！」

と、お志津の鼻先に天を向くように大きく硬化したモノを見せ付け、鼻息を荒げて、お志
津の裸体の上に重なって行った。

お志津の口からアアーと絶望的な声が漏れ、牢の中からお美代の悲痛な泣き声が続いた。

その後も何人もの男から入れ替わり立ち替わり輪姦され、完全に意識を喪失したお志津が畳の上に転がされていた。

「へへ・・・世間でも有名な海産物問屋の美人女将が何てざまだ！」

正常な意識を失ったまま、荒い息を吐き続ける、男達の体液に塗れた裸体を取り囲んで見下ろしながら笑い合った。

既に手足を拘束していた縄は解かれていたが、閉じ合わせる力を喪失して、開いたままの股間からは、男達が放出した白いモノがお志津自身の体液と混じり合い、ドロドロと流れ出ている。

男達の嘲笑を浴び、卑猥な視線を受け続けて、少し意識の戻ったお志津が薄く目を開いて、取り囲む男達を霞む目で見た。

身体は綿のように疲れ、恥ずかしい所を男達の中から隠す気力も体力も喪失していた。

お志津の意識が戻り始めたのに気付いた沼田屋は、快哉の笑みで顔を崩して、

「お志津！お前の身体を気に入ったぜ！これから末永く此处で飼ってやるから喜べ！」

と、声を掛けた。

「それなら、約束通り、妹を此处から帰して下さい！」

力の入らない身体を振り絞って精一杯の声を上げた。

「約束だ？お前もバカな女だぜ！拐かしに商人同士の約束も糞も在るか！」

と、笑い上げた。

相兵衛の非情な言葉に、予想しうる回答であったが、一縷の望みを託していたお志津は、「ああ・・・やはり欺いていたのね・・・」と、声を上げて泣き崩れた。

そんな悲嘆にくれるお志津の身体を数人がかりで抱き上げ、「明日から姉妹でタップリといたぶってやるから、身体を休めとけ！」と、言い残すと、乱暴に牢に投げ込みバタンと扉を閉めた。

こんにやく 弱弱責め

狭い牢内で、姉妹が身体を密着させながら布団に収まっていた。

その安らかな寝顔は、卑劣な男達から受けた心と身体の傷を、暖かく柔らかな妹の身体と

触れ合わせるにより、癒やそうとしているかのようであった。

お美代も同じように、姉に甘えるように身体を寄せていた。

周囲を壁と襖で囲まれ、陽の差さない薄暗い部屋の中であつたが、すっかり朝が明けていることが、気配で分かった。

遠くから男達の笑いさざめく声が聞こえて来て、段々とそれが近づいて来るのが分かった。

お志津の顔に、恐怖と緊張感が走った。

何時の間にか目を覚ましていたお美代も、怯えて身体をガタガタ震わせていた。

「良く眠れたかい？」

牢の前に立ち、こちらを覗き込む男達が声を掛けた。

男達は美人姉妹に対する淫靡な責めへの期待に爛々と光る目で檻の中の二人を見つめた。

牢の扉を押し開き、二人の男が入って来た。

男達の肩には麻縄の束が掛けられていた。

心身共に打ち拉がれていた姉妹は男から手を背後にねじ上げられ、大人しく縄掛けされていった。

両手を高手小手に縛り上げると、余った縄を前に回して、乳房の上下を二重三重に巻いて縄止めを済ませた。

一仕事終え、ホウと息を吐きながら、お美代の小ぶりだが、白桃の様に形の良い乳房と、お志津の撓わに垂れた抱き重りする豊満な乳房を見比べた。

「さあ！出るんだ！」

お志津を縛り上げた縄尻を握り絞めた男が、白い背を平手で叩いて、声を掛けた。

狭くて低い檻の出口に向かって腰を屈ませ、豊かに張った尻を揺るように歩を進める、お志津の臀部を背後から見つめ、昨日お銀の張り形と13人の男達により責め立てられた陰部が痛々しく腫れあがっているのが分かった。

いくら、男を知っている女の身体とはいえ、一度にこれほど多数の経験をしたことは無かつただろうと思うと、同情心が涌くよりも、何故かこの貞淑な女をもっと責め罵り、粉々に破壊したいという陰湿な欲望が込み上げて来て股間がジワジワと熱を持ってくるのであった。

姉妹が連れ込まれたのは、昨晚お志津が男達の目の前で着衣を奪われた茶室であつた。

明るい陽の差す書院の文机の上には、筆と硯と上質の半紙が置かれていた。

「お志津、何時までもお前が、海産物問屋の駿河屋の若女房のままでは、こちらも嘉兵衛さんに遠慮があって、やり難い・・・ここは一つ、亭主と別れて貰おう・・・」

相兵衛の言葉に、愛しい嘉兵衛の顔が浮かんだ。

「どうした？もうお前は嘉兵衛の前に顔を合わせることが出来ない女になってしまったのだろう・・・」

相兵衛の言葉通り、自分は卑劣な男達の手にかかり、操を蹂躪されもう、夫の前に顔を出せる事の出来ない女になってしまったことを思い知らされた。

しかし、自分を信じ、愛してくれる愛おしい夫から引き裂かれるのは断腸の思いであった。

「これから、離縁状を書いて貰おう・・・」

と、こうやって書くんだと、懷から見本を取り出して、お志津に見せた。

沼田屋の指し示す離縁状の見本を見せられ、お志津の貌は見る見る青ざめ、固く目を閉ざすと、顔を背けた。

相兵衛の用意した離縁状の大意は次のようであった。

『嘉兵衛殿、

私は、恋しい人が居たのに親の言い付けに従って嫌々貴方と結婚しました。

貴方と結婚生活を初めて以来、一度も幸せを感じたことは有りませんでした。

特に、閨では女の扱い方も知らず、自分勝手に私の身体を抱いて、さっさと終わらせると高たかい嶺びきをかいて寝てしまう毎日でした。私は満たされぬ思いを治めるため、毎夜貴方が寝静まってから一人慰めるのでした。

今、私は半次さんという素晴らし男に巡り逢いました。

半次さんは貴方と比較にならない程美形で、あの方も素晴らしく、貴方とは比べようもない程逞しいモノで突き上げ、毎晩私を満足させてくれます。

私は半次さんと暮らすことに決めました。

ですから、私の事は探さないで下さい。

別れに当たって、今の私には、貴方に差し上げられる物は有りませんが、気持ちばかりに、私のアソコの周りの毛を剃り上げて、送らせて頂きます。

まだ、貴方に私を思う気持ちが有れば、その毛を眺めて、匂いを嗅いで思い出して下さい。』

相兵衛が面白そうに読み上げる、お志津の夫を愚弄し、お志津自身を淫乱な女に見せ付ける内容に、周りを取り囲む男達も爆笑した。

そして、半次に対して、お志津と一緒にいるところを町の衆に見せ付けろと沼田屋が命じた意味が理解出来た。

これなら、世間の人々はお志津と半次が付き合っていて、良い仲になって、二人で駆け落ちしたと信じるだろうーと、想像した。

純朴な夫を余りにも嘲弄^{ちやうろう}する相兵衛の文章に、お志津は涙を流してイヤイヤと首を振った。

「嫌かい？嫌だと言っても、俺は書かせてやるぜ！」

と、冷酷な目で口にした。

おい！と、後ろを振り返って声を掛けた。

相兵衛の意を受けた男が、箒^{ほう}を手にして前に進み出た。

箒には、握り拳ほどある浅黒い芋が山のように積まれていた。

「これが何だか分かるか？」

相兵衛がそれを掴み上げて、お志津に見せ付けた。

「これは、今朝採れたばかりの蒟蒻芋^{こんにあく}さ！・・・採れたての蒟蒻芋なんて灰汁^{あく}が強過ぎて鼠だって嚙りやしない。一年寝かして、灰汁を鎮めてから、やっと灰汁抜き出来るって代物さ！・・・こいつをお前達のアソコに入れたらどうなると思う？」

手にした芋を、青ざめてじっとそれを見つめる姉妹に見せ付けながら笑った。

「ホホホ・・・お前達、蒟蒻責めに遭うんだって？私も昔やられた事があるけど、本当に気が狂うほど効くよ！山芋のトロロ責めも痒いけど、蒟蒻は山芋の千倍はキツイからね！」
何時の間にか姿を現したお銀が面白そうに声を上げた。

「どうだ？離縁状を書く気になったか？」

青ざめて俯くお志津に声を掛けた。

相兵衛の脅迫に恐ろしいものを感じるが、そのようなおぞましい離縁状を自分が心底愛した夫に書く気にもなれず、唇を噛みしめるのだった。

お志津の拒絶の表情に、「それじゃ、アソコで蒟蒻芋をとっくりと味わって貰おうか。お美代にも付き合って貰うぜ・・・恨むんなら巻き添えにした姉を恨むんだな！」と、淫靡な笑

みを浮かべて宣告した。

男達は姉妹が暴れないように、周囲から押さえ付けると、脚を掴んで無理矢理左右に大きく開いた。

お銀も手伝って、女達の秘裂を押し開き、剥き出しとなった秘園をまさぐって、秘孔を開かせた。

「へへ、昨日はお前の姉の方にかかりっ切りで、一人寂しい思いをしていたんだろう？ほら、ちょっと触っただけでこんだけ濡れてきたぜ！」

男達の虐待に慣らされたお美代の身体は、心は拒絶しても男達が繰り出す淫具の前に次第に淫門の扉を緩めていった。

お志津も男達から責め罵られ疲弊した身体であったが、お銀の巧みな指と舌を駆使した攻めにより、固く閉ざしていた女の城門を開いていくのだった。

おお！痒い！と悲鳴の様な声を上げて芋の皮を剥いていた男が、堪え切れずに剥き上げたばかりの芋を姉妹の淫孔に押し入れた。

その大人の男根ほどの大きさにむき上げた物を内部に受け入れた瞬間、姉妹はウッと息を吞んで身体を硬化させた。

最初はその大きさに、太い淫具を挿入された時の様な衝撃を受けたが、膣内に収められた芋の塊が本来の性質を現し始め、芋から滲み出した毒素が周囲の樹液に溶けて混ざり合い、ジワジワと痒みが込み上げて来た。

「アアーッ！痒いわ！」

華洞内から込み上げる激しい痒みに、お志津もお美代も押さえ付ける男達の手の中で悶え狂った。

その植物の塊から発する痒みは、次には、言い様の無い痛痒感に変わり、次第に激しい灼熱感に代わっていった。

女体の内側から襲い来る、熱くて、痛くて、痒い感覚にヒィヒィと悲鳴を上げて、押さえ付ける男達を弾き飛ばさんばかりに身悶えた。

「どうだ？離縁状を書く気になったか？」

脂汗を滴らせて悶え狂う姉妹を残忍な目で眺めながら聞いた。

お志津は眉間に深く皺を寄せ、歯を食いしばって激痛を堪える風情であったが、敗北を認

めるのは時間の問題であると感じた。

「アアーッ！もう駄目です！お助け下さい！」

自分は何とか堪えられても、同じ苦しみを背負わされた妹は耐えきれないだろうと思うと、悲痛な声でお志津が叫ぶ様に言った。

「離縁状を書くんだな？」

今にも気が狂いそうな程、悶え苦しむ姉妹の様子を嬉しそうに眺めながら問い質した。

「はい！書きます！」

苦しげな息の下でお志津が返事した。

気丈な女をここまで追い込んだという快感を胸にして、

「それじゃ、取ってやれ！」

と、命じた。

男達の手で蒟蒻芋の塊が膣内から取り出されたが、肉洞内に残された激烈な痛痒感をもたらす毒素を少しでも薄めようとするかのように、激しく樹液が流れ出ていた。

「ちょっと凍みるが、痒みを取るにはこれしか無いからな・・・」

割り箸の先に綿を巻き付けると、酢に浸して膣内を洗った。

酸液が華洞の内側を熱を持って刺激し、悲鳴を上げたが、男の言うように、激しかった痒みは次第に薄れていった。

「さあ！離縁状を書くんだ！」

「お願いします！お美代も助けて下さい！」

「お前が、離縁状を書き終わったら助けてやるよ。」

と、悶え苦しむお美代の姿を横目に冷たく言い放った。

激しい責め苦にグッタリとするお志津を文机の前に座らせた。

陰虐な拷問の前に、一度は屈服したお志津であったが、そのようなおぞましい離縁状を書くことを迫られ、筆を手にしたまま机に突っ伏して泣き崩れるのであった。

「どうした？早く書くんだ！・・・仕方無いな！お美代にもう一つ蒟蒻芋をくれてやれ！」

手紙を書き始めないお志津の態度に怒りを感じたように声を荒げた。

「お前の妹はな、今では後ろの穴も開発されて、充分使えるんだ！今度はケツの穴に芋を突っ込んでやれ！恨むんなら薄情な姉を恨むんだな！」

「アアー！イヤ！そんな所に入れないで！」

狂わんばかりに身悶えるお美代の口から新たな悲鳴が上がった。

「分かりました！書きます！」

前後二つの穴に蒟蒻芋を押し入れられ、このままではお美代は本当に気が狂ってしまうと感じたお志津は紙に筆を走らせ始めた。

妹を救いたい一心で、他の感情が入る余裕は無かった。

一心不乱に書き進めるお志津の姿に、相兵衛は勝利の愉悦感を感じていた。

お志津の書き上げた手紙を引ったくるように奪い、文面を確かめ、ニヤッと笑みを浮かべた。

「良いだろう。お美代も助けてやれ！」

相兵衛の許可が下りて、強い刺激に耐えかねて失神したように動かなくなったお美代の身体から芋の塊を取り出し始めた。

「へへ・・・そんなに良かったのか？見ろよ、小便までちびってやがるぜ！」

体内から芋の塊を掘り出しながら、ドクドクと淫液を垂れ流す肉の祠とは別に、グッタリとしたお美代の股間がビッショリと濡れているのを発見して哄笑した。

「畳にまで撒き散らしやがって、これじゃ臭くてしょうが無いぜ！お銀良く拭いておけよ！」

お美代の後始末を命じられて、お銀が不満そうに鼻を鳴らした。

「それじゃ、お前の元亭主に送る最後の物を用意して貰おうか・・・」

柱に立位で縛られたお志津の姿を淫靡な目で見つめながら口にした。

「この女はな、何時もソコの毛を剃り上げて丸出しにしておくってのが、決まりなんだ！」

丁度、亭主に送る物が出来て良かったじゃ無いか！」

柱に縛り付けられたまま項垂れるお志津に面白そうに笑いかけた。

足下には竹の棒が置かれ、両脚はその竹棒に縛り付けられ、両太腿は大きく左右に押し広げられていた。

全身を固く縛められ身動きを封じられたお志津は、これから男達がこの身に加える、淫靡な行為を意識して、戦慄が走り、抑えようにも身体が震えた。

「おい！」

相兵衛が横にいるお銀に目配せした。

「あいよ！」

と、お銀がカミソリを手に嬉しそうに返事をした。

自分の股間の毛を剃り落として、愛する夫に、忌まわしい手紙と共に送りつけようとする悪鬼達の計略に怖気のような物を感じるのであった。

しかし、此処に集まった男達の並の人間では考えられないような残虐性の前に、散々翻弄され打ちのめされたお志津は、自分の力ではどうしようも無いと、諦めの様な感情が込み上げて来て口を噛みしめるのであった。

そんな絶望の淵にいるお志津に気遣いすること間無く、開け放たれた股間の前に胡座を組んで腰を降ろしたお銀は、鼻歌を歌いながらカミソリを振り上げた。

「今度は、このおケケを贈り物にしなけりゃいけないから、無駄にすることは出来ないね・・・一本一本根元から丁寧に剃り上げなければいけないね・・・」と、指先で叢を撫で付けながら上機嫌で口にした。

成熟した女体をひっそりと護るように繁茂した妖艶な茂みに嬉しそうに指先を這わせ、毛筋に沿って撫で下ろしたり、逆撫でしたりしてお志津の羞恥心を誘った。

そんなお銀の陰險な悪戯に、どうせ剃るなら早く剃り上げて欲しいと思うのであった。

「それじゃ、行くよ！」

艶を帯びた濃密な春草に対する悪さに満足したのか、お銀は指先で何本かの恥毛を摘まんで引っ張ると、その付け根にカミソリの刃を当てた。

ゾリッという音を残して、縮れを帯びた毛がお銀の指先に移った。

「ほら！見てごらん！これを元亭主に送ってやるからね！」

満面に笑みを浮かべて、摘まんだ毛の束をお志津の顔面に持って行き見せ付けた。

自分の完膚無きまでの敗北を思い知らされ、固く閉じた瞼の間から涙がこぼれ落ちた。

「元亭主に送る大事な毛だからね・・・一本も粗末に出来ないね・・・」

と、呟きながら剃り取った陰毛を懐紙の上に並べた。

指先で新たな春草の束を摘まむと、カミソリの刃を立てた。

こうして、懐紙の上にはお志津から剥ぎ取った、^{なま}艶めかしい気配を発する縮れを帯びた毛が積み上げられていった。

「全く、シットリとして、艶があって良い毛だね！男とヤリ狂っていると擦れ合ってもっと縮れて短くなって来るもんだけどね・・・」

お志津の羞恥心を逆撫でするように丁寧にカミソリの刃を当てて一本一本剥ぎ取る様にながら、狡猾そうな微笑を口元に浮かべた。

「こんな悩ましい物を送り付けられたら元亭主も変な気分になるだろうね・・・旦那達もお

裾分けに一本欲しいんじゃないかい？」

懷紙の上に^{うずたか}堆く積み上げられていく、黒々と艶を放つ恥毛の山と、目を血走らせて取り巻く男達の顔を交互に見ながら、嘲るように笑い声を発した。

「ほら！出来たよ！」

お志津の秘裂を覆い隠していた淫靡な叢は全て剥ぎ取られ、跡には童女のようにスベスベの肌に、柔らかな肉の盛り上がり間を割るようにキツパリと切れ込みが走っていたが、童女と言うには余りにも婀娜っぽいムンムンとするような熟れた女っぽさを感じさせる剥き出しの雌芯が隠しようも無くさらけ出されていた。

全ては終わってしまった！と、いう哀しい諦めが込み上げて来て、前屈みにがっくりと首を垂れさせたまま、人の字型に緊縛された裸身を嗚咽しながら小刻みに震わせた。

身も世も無く泣き崩れるお志津とお美代の哀れな姉妹の姿を目に、美貌の小町姉妹をここまで貶めた一と、残忍な男達の嘲笑が何時までも部屋の中に^{こだま}飢し続けた。